

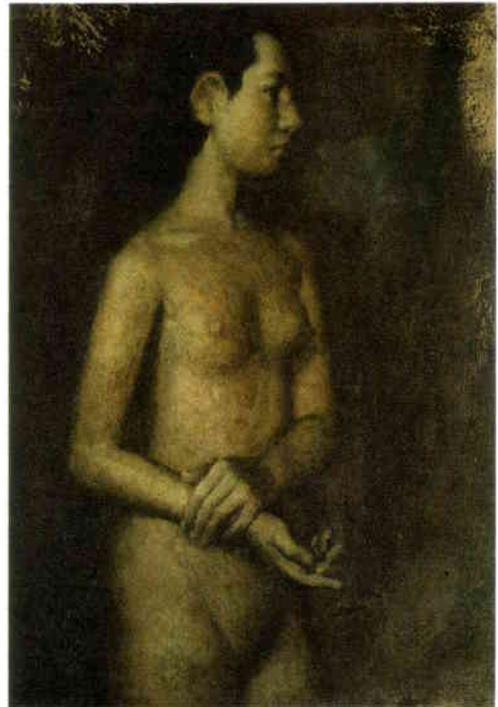
# 市民の意見

発行：市民の意見30の会・東京

NO.116  
2009/10/1



発行者の住所：〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-29-12-305 TEL:03-3423-0185 FAX:03-3402-3218  
郵便振替：00120-9-359506 eメール：iken30@mwb.biglobe.ne.jp ホームページ：http://www.1jca.apc.org/iken30  
\*隔月刊/購読料・送料とも年2500円、一部400円、65歳以上および身障者の方は年2000円 グリーン会員の方は年1000円



日高安典「裸婦」(無言館所蔵 作者の経歴は3ページ)

あと五分、あと十分、この絵を描きつづけていたい。  
外では出征兵士を送る日の丸の小旗がふられていた。  
生きて帰ってきたら必ずこの絵の続きを描くから……  
安典はモデルをつとめてくれた恋人にそういって戦地に発った。  
しかし、安典は帰ってこれなかった。  
もし、あなたの美術館がお国の美術館だったら、私はきつと兄の絵をあずける気にはならなかったでしょう、と弟の絵典さんという。  
なぜなら、安典はそのお国の命令で戦地へ行ったんですから……。

(窪島誠一郎「無言館 戦没画学生「祈りの絵」講談社刊より」)

## 市民の意見 116号 目次

### ●特集1 新政権と市民運動

座談会 市民は新政権に何を突き出すのか

白川真澄、遠野はるひ、山口素明

鳩山政権の安保・外交政策の行方 杉原浩司

### ●特集2 非核化を目ざして

核兵器廃絶は可能だ 秋葉忠利

ヒロシマ・デーとナガサキ・デーの今年 諸橋泰樹

### ●運動の現場から

非暴力が平和をつくる 大畑 豊

非暴力平和隊の活動を通して 徳留由美

246キッチンを知っていますか 丹羽雅代

定額給付金を反貧困カンパへ 吉田和雄

●横浜市での自由社版中学校歴史教科書採択を許さない 朝倉賢司

### ●小田実遺稿2周年

7・18 東京 守屋和子

7・25 関西 北川靖一郎

### ●文化

巻頭詩 平和のいのり 比屋根憲太

連載エッセイ⑬ バランスのデザイン 鈴木一誌

本の紹介『下山事件全研究』 天野恵一

1968年の出版三書 吉川勇一

映画の紹介「誰がため」 本野義雄

●その他 市民意見広告運動から 葛西則義

事務局だより 吉川勇一

ふしぎの国のありか まつだたえこ

読者懇談会の報告 33 読者のおたより

インフォメーション 37 会計報告/編集後記

◆カット 吉岡セイ ◆題字 安西賢誠

38 34 37 36 25 32 31 30 13 2 29 28 26 24 23 21 20 18 14 11 4

### ☆10月の読者懇談会のご案内☆

・テーマ「非暴力による紛争解決こそ最も現実的だ」大畑豊さん(非暴力平和隊、本誌P20論文参照)  
日時：2009年10月23日(金)午後6時半 参加費500円/ピープルズ・プラン研究所(文京区関口1-44-3信正堂ビル2F 地下鉄有楽町線江戸川橋駅1-b出口3分 P37地図参照 電話：03-6424-5748)

# 平和のいのり

沖縄県南城市立大里北小学校六年

比屋根 憲太

石に刻まれた家族の名に

涙を落とす祖母

なんの形見も残っていない石に

声にならない声で

石をさすり

石をだきしめる

小さな声でとても小さな声で

「本当は話したくないサー」

少し首をかしげて

空を見上げる

人さし指の大きさの大きな傷

あごと左腕に残る

戦争の傷あと

祖母は傷の手当てをするために

水くみに行った

防空ごうに姉を残し 母と二人で

そのあとすごい光と音が…

そのまま姉はもどらなかつた

「いっしょに連れて行けばよかった」

「ごめんね ごめんね」



画：吉岡セイ

沖縄県平和祈念資料館 2009 年度第 19 回「児童・生徒の平和メッセージ展」詩部門(小学校)最優秀賞。同年 6 月 23 日、激戦地となった沖縄県糸満市摩文二(まぶに)の平和祈念公園で開催された県主催「沖縄全戦没者追悼式」で比屋根憲太君が朗読。『比屋根君は「おばあちゃんや亡くなった人のことを思い浮かべながら、大変だったねと声をかけるつもりで読みました。世界の戦争をしている国々に平和の祈りが届いてほしい」と話した。(朝日新聞 2009 年 6 月 24 日夕刊掲載記事より)』

と何度も何度も  
きたときよりも  
石を強くさすり  
石を強くだきしめる  
ぼくはもう声を上げて泣いていた  
そして祖母の背中をずっとさすった

こんな青い空に  
こんなおだやかな沖縄に  
戦争は似合わない  
祖母のくしゃくしゃな涙も  
似合わない

そんな祖母はもう今は歩くことが  
できない  
毎日毎日空を見て  
きつと  
生きている喜び  
生き残った悲しみを感じて  
いるのだろうか  
ぼくは車いすをおして  
祖母のいのりを引きつぐ  
戦争のない平和な国を

(沖縄県平和祈念資料館提供)

▼ 表紙絵の作者 ▲



日高 安典

(ひだか・やすのり)

1918(大正7)年1月24日、鹿児島県種子島に生まれる。1937(昭和12)年4月、東京美術学校油絵科に入学。豊島区長崎町のアトリエ村に寄宿する。1941(昭和16)年12月繰り上げ卒業。翌年入営し、満州(中国東北地方)メントカより南方へ向かう。従軍中は画才をみとめられて特別室で絵を描いていたが、1945(昭和20)年4月19日、ルソン島バギオにおいて戦死。享年27歳。

総選挙 緊急座談会

成長神話と対米依存からの脱却を

# 市民は新政権に何を突き出すのか

—社会ビジョンの共有と横のつながりを求めて—

出席者：白川 真澄 (季刊『ピープルズ・プラン』編集長)  
 遠野 はるひ (フィリピントヨタ労組を支援する会/オルタモンド)  
 山口 素明 (フリーター全般労働組合執行委員)  
 司 会：吉田 和雄 (本誌編集委員)

## あの総選挙は何だったのか

司会 まず総選挙結果についてのご感想をお願いします。

白川 民主党の勝利というより自民党が大敗したということだと思います。どの調査でも、有権者の圧倒的多数が「政権交代」は良かったと答えている。しかし、たとえば子ども手当の支給や高速道路の無料化については支持しない人の方が多く、民主党の政策が支持されたとは言えない。自民が7百万票減らし民主が8百万票増やした比例区をみても自民党への不信任であった。天下りとか年金記録の消失問題など従来の自民党政治への批判に加え、小泉改革の下で貧困が急激に増え格差が拡大するなかで、小泉改革に対する幻想が完全に破れたというのが、今回の大きな特徴です。

山口 フリーター全般労働組合をやっています。正直なところ私たちにとっては「総選挙は眼中になし」というところですよ。あの種のスペクタクルとして、総選挙に関心を持つ組合員はいましたが、現実的な政策選択の問題として総選挙を意識したり、内部で議論したことは全くありませんでした。むしろぼくは、みんながある意味、上を向いて歩いているのが気になっていました。あらゆる政党が生活者重視を言いましたが、たとえば子ども手当にしても、子どもを

持つ展望も持てない組合員が圧倒的です。高速道路を無料化されても誰も車を持っていない(笑)。エコ家電だという大型液晶テレビを誰も買えない、置く場所もない各政党から出された政策のメニューが、自分たちに何の利害関係もなかった。個々の利害を離れどんな社会を作るのか、というビジョンの議論がほとんどなかった。

麻生が来るというので、選挙最終日に組合員が池袋に見物に行きました。大量の日の丸が配られ、たくさん右翼の人たちが麻生コールをやり、麻生も「日本を守る。野党に転落した自民党は、このまま極右ナショナリスト政党に純化していくのではないか。その組合員はその光景を見て怖くなったと言います。社会ビジョンの議論をきちんとしないと、貧困、格差の問題も、偏狭なナショナリズムの中に絡め取られてしまう、という危機感があります。

遠野 私は、多国籍企業や国際金融資本の規制、労働運動の国際連帯など、オルタナティブローバリゼーションに関わるテーマに取り組んできました。ところが2003年頃から、地元の中田宏前横浜市長が、公共サービスのみならず新自由主義的な政策を次々と打ち出してきたのです。新自由主義は地域からはじまると実感し、月1回の地方自治勉強会を横浜でスタートし、2年前から地域の女性たちと市議会議員を招いて

報告を聞く市政ウオッチネットワークもつくりました。国を草の根から変え、下からのグローバルゼーションを進めるためには、地方自治をしっかりと考えていかなければいけないと選挙に関わっています。

今回の総選挙では、阿部知子さん(社民党)の支援をしながら、横浜市から出た民主党候補者たちの支援もしました。市政ウオッチネットワークで、市民側の候補を来春の横浜市長選に立てようと臨んでいたのですが、7月29日に、突然中田市長が辞任し、総選挙と同日選挙になりました。市長候補を立てることは無理なので、中田市政の検証と新市長への提言をと、NPOや社会運動で活動している人を招いて市民フォーラムを開催しました。

今回の選挙は、戦後の日本の歴史に残るすくく大きな出来事であったと思います。政官財の癒着構造の崩壊が始まり、地域ではこの構造を支えていた利益集団―医師会、商工会議所、農協、町内会などで地殻変動が起きていました。また、マスコミがマニフェストなどを練り返し報道したこともあり、若い世代、とりわけ子育て世代が、日本の未来に危機感を持ち、日本の現状と将来を考え始めたのは、投票行動にも反映されています。

## 労働者派遣法とこれからの働き方

司会 異なるスタンスから面白い意見が

たくさん出たと思います。



白川真澄氏 『季刊ビーブルズ・プラン』編集長。「グローバル座標塾」講師。

白川 山口さんのご指摘のとおり、社会ビジョンをめぐる争いがなかったというのが、大きな特徴だと思います。小泉の市場原理的政策には反対と言いつつ、民主党もFTA(自由貿易協定)交渉を推進するとか、「貯蓄から投資へ」と言う小泉路線を引き継いで金融課税への軽減は継続するとか、政策が支離滅裂で、どういう社会を目指しているのかがはっきりしない。ところで労働者派遣法の抜本改正は、連立政権の公約にも入り、今後国会でも大きな争点になる。これは運動の力が社会問題に押し上げたテーマです。経済界は、派遣規制をしたら企業の競争力が落ちるとか、失業が増えるとか脅しをかけてきていますが、こうした問題が争点になってきたこと自体、政権交代の一つのプラス面ではないかと思うのですが。

山口 派遣法の抜本改正はうちの組合も求めてきたことです。ただ、製造業の派遣労働を全面的に規制するのか、派遣労働者からの中間搾取を規制するのか、それとも

派遣労働そのものを見直すのか、政党でも組合でも思いは様々です。また、こういうビジョンに基づいて派遣法の抜本改正を行なうのか、という議論が全くない。いまそういう声を拾えば票になるということで取り上げているに過ぎない。他方で経済界は派遣に規制を加えれば失業が増える、派遣が認められているから製造業が国内に残っていられる、と言う。それを禁止すれば海外に出て行きますよ、と。ぶっちゃけて言うと、企業の言うことも分かる(笑)。

格差の問題は実は国内だけの問題ではない。東アジアなど途上国労働者の賃金や労働条件はすくく低く抑えられている。こういう現状を考えて、日本国内での働き方や生活の守り方も考えなければいけない。直接雇用を求める派遣法改正は、雇用によって人々の生活が安定するはずという前提に基づいている。組合はその主張を手放せないし、企業にも政府にも雇用の責任を要求していく。しかし、雇用だけを通じて人々の生活の安定を図るという仕組みは、日本国内において終わろうとしていると感じます。例えばガソリンスタンドでは、地域に密着して人間関係の中でお客さんを確保していくという従来のビジネスモデルが、セルフ化の進展で変わってしまった。もう人を必要としない。だがそれでも人は生きています。そこから、ではどう生きていくのか、という問題が横たわっているのが見え

てくる。そこに答えないと、単に雇用を求めると言うだけでは、これはなんともしがたい。今後も保守2大政党が政権交代し政権はその都度シフトするだろうけれど、権力が移譲されるだけで、社会構造が変わるわけではない。保守勢力の対立の中で出来た隙間につけ込んで派遣法の改正を争点化することはできる。その意味では、政権交代はあったほうが良いけれども。



遠野はるひ氏 横浜アクションリサーチセンター、フィリピントヨタ労組を支援する会国際部長、オルタナティブ事務局次長

**遠野** 労働者派遣法の改正や最低賃金の上昇によって、企業は海外に逃げていくと財界は脅しています。でも、例えばエコカーへの買い替えで約3700億円、大型液晶テレビでは10%のエコポイントがつくグリーン家電促進基金で約3000億円の補助がでています。これらは、輸出メーカーへの補助金で、これらの企業は赤字を減らしました。また、雇用調整助成金も事業主に給付されている。つまり企業へは多額の税金が投入されています。税金を投入する企業に対して、例えば地域の工場を海外に移転せず雇用を守れというような条件をつけておくべきだったと私は思います。

今後、子育て支援や高齢者介護、医療などの分野でまだ雇用は広がる可能性があります。天下りなど国家公務員の悪しきシステムは変えるべきですが、私は公務員の人員削減には反対です。ワークシェアリングであれ、同一価値労働同一賃金とセットの非正規雇用であれ、雇用条件を整備し、若者の雇用を増大させていくべきです。

**白川** とにかく何でもいから企業が雇用を創り出せと要求するだけでは、じゃあ劣悪な非正規雇用でもいいですね、と切り返される。縮小していくべき産業や労働と、介護や医療などもっと増やさなくてはいけない分野がある。企業だけで雇用を保持することは限界に来ている。これからどんな生活をして、どんな労働が望ましいのか、という社会ビジョンの議論が不可欠です。

**山口** 介護や福祉への転換が必要という点は同意します。しかしおしなべて低賃金。みんな一生懸命に資格をとって、仕事の幅を広げていこうとしているけれど、障害者介護も20歳代だからできるのであって、長期に20年30年やれる仕事ではない。セキュリティ部門でも、まだたくさんの方が求められているが、これも大体が低賃金。

これは市場原理からすると変な話です。人がやりたがらない大変な仕事で、需要に比べて供給が少ないわけですから本来、労賃は上がらなくてはならない。ではなぜ上がらないかというと、それは失業が存在す

るからです。介護の現場だって多くの人が必要とされているわけです。でも賃金は安いし、きついし、将来の展望もない、生きていけないから供給が少ない。それを生きていけるようにしなければいけない。そのためには補助金を支払うという手段もあるけれども一番簡単なことは失業をなくすことです。そういうビジョンを備えた話であればみんな沸き立ちますよ。個別の企業に雇用の責任を負わせるだけでは不足で、社会的に失業がなくなるということ、居住の心配がなくなり最低限の生活が保障されること、そういう政策が焦点とならなければなりません。

### 生存権としての住宅

**司会** 山口さんのハウジングプランを紹介してください。民主党がNPO、NGOなど市民活動を取り込もうとする流れに対して、ご意見も。

**山口** 実行委員会を作り、空き住宅を自分たちで直して住むというプロジェクトです。四谷で第一号をやっていますが、実際やってみるとこれは大変なことです。自分たちでできないところは大工さんにもお願いし、みんな無償でやるのですが、1日2日で終わる話であればよいが半年ほどかかる。社会的な意義があるから給与に関係なく働きましょうというNPOの「やりがいの搾取」という問題も起こる。そういうしながらも

て、経営を成り立たせています。居住の問題も、それぞれの運動体が情報交換できるネットワークを構築できたらすごく良いのではないかと思います。

**山口** 不動産業では空室情報をネットワーク化しているが、運動の側は弱い。住宅に限らず必要としているモノやヒトの情報が行き渡らない。東京の一人暮らしの老人に、いきなり若者と同居をシェアしないかというのは無理だが、一方ではネットカフェ暮らしや三畳一間で暮らしている若者がいる。何とかできないものかと思う。

**遠野** 私の友人が、介護事業で雇用するのは、信頼関係を持てる人。信頼関係が根っこにあるやさしい社会を築ければ、一緒に住むことも可能になる。

**山口** 公共性に関する日本の感覚についても若干の不信がある。民の活用が市民活動の活用ではなく、かえって公共性を掘り崩す結果になる場合もある。市民運動の集會やデモの出発点としておなじみの宮下公園を、ナイキが資金を出してロッククライミング施設などがある総合アミューズメント空間とする計画に渋谷区が調印した。野宿者が住めるような公園ではなくて、健康で明るい空間が市民の求める公共的なスペースである。でも本当の公共の空間とは、特定の目的の場所ではなくて、誰でもどんな目的でも使用できる空間でなければおかしい。しかしナイキ公園に抗議しているN

POは少ない。やっているのは「のじれん」(渋谷・野宿者の生活と居住権をかちとる自由連合)くらい。

**司会** ベーシックインカムは、人の生き方の選択の自由を認める大切な社会ビジョンだと思う。もはや右肩上がりの経済成長が望めない中、政党は脱成長のビジョンもベーシックインカムのビジョンも打ち出せないでいる。



司会 吉田和雄 本誌編集委員

**山口** 労働の質が変わってきた。何か具體的なものを作り、その対価として賃金をもらうことが伝統的な労働のイメージであったが、サービス産業のウェイトが高まり、何を作っているわけでもないが、みな人に対して何かをして生きている。家庭内で家事やケアの仕事をして、それで生きていけないというのはおかしい、家で介護をすること、外で介護士をすることは同じ価値の介護労働である、働かない連中に給与を払うというのではなく、働き方の違いを正當に認めるべきだ、という考え方が広がりつつあります。ベーシックインカムに違和感がある人は、貧困層にこそ支給すべきで

はないかという。でも、水道は誰にでも供給されたほうが良いように、生活資源の根本的なところは誰にでも供給されたほうが良いという社会的認識は生まれつつあると思いますね。

**白川** ようやくその方向に動いてきているけど、労働中心主義の神話はまだ強い。生活保護だって、窓口では、働けるんでしょ、とまずは聞いてくる。働けるのなら支給しませんよ、と。障害者についてもできるだけ働けという神話は続いてきたわけだから。政党レベルでは、経済成長主義からの脱却は本当に難しい。社会運動の側がよっぽどそういうことを出さないと、政党の側からは出てこないと思います。

### 極右化する自民党？

**司会** ナシヨナリズム、安保・外交、憲法の問題について、最後にお願ひします。

**白川** 安倍政権が崩壊して右翼勢力は下野したが、実際には田母神論文や在特会(在日特権を許さない市民の会)の動き、中田宏前横浜市長の置き土産の「新しい歴史教科書をつくる会」の教科書採択、山田宏彰並区長と組んだ「『よい国つくろう!』日本国民会議」の設立など、彼らは今も非常にエネルギーに動いている。ただやはり彼らの最大の政治的拠り所は自民党だったから、自民党が壊滅的な打撃を受けたことで、右翼ナシヨナリズム潮流も大きな打撃



を受けたのは間違いないと思う。伝統的な支持基盤が壊れ、来年の参議院選挙では野党としての選挙経験もなく、自民党の再建は大変だろうなと思います。だからといって右翼ナシヨナリズムに純化して自民党が再生するかどうかというと、それも簡単ではないと思います。

**遠野** 民主党が期待に沿えなければまた右にぶれて、右派の政治家が力をつけてくる。その代表が中田前横浜市長だと思っ。中田市政の新自由主義的側面をマスコミはほとんど報道しなかったこともあり、中田市政の負の部分の情報が少なかつた。辞任直前の8月4日に、「つくる会」の教科書が、中田の選んだ教育委員により採択され、みな「えー！」って驚いた。市民フォーラムでも経過報告が行なわれ、抗議の声が相次いだ。現在、18区ある横浜市を全市1区にして、採択するという方針を市教育委員会が決定したので、市民団体は神奈川県教育委員会に認めないでは

しいと要請をおこなっている最中です。横浜での「つくる会」教科書の採択は、日本全国にものごく大きなインパクトを与えることになります。私たちは横浜市民として、この動きを見逃してきた責任を痛感しています。

**山口** 在特会の言動は、本来保つべき節度を失っている。嫌悪感、憎悪感など何もなくてまっさらな人はいないけれど、そういった嫌悪感を公にしていいか悪いかについて普通は区別をつける。在特会というよりも、むしろ支配層がその節度をなくしている。ナシヨナルなものや排外主義的な言説が公的に垂れ流されてきた。「つくる会」の教科書もそうです。支配層がナシヨナルなものにどっぷりつかっていることを認識しなければいけない。だから自民党が極右政党化していくのではないかとという懸念も、根拠のないことではない。排外的で憎悪を表に出すような言説をする政党になると、もう論理的な説得は意味をなさなくなる。論争ではなくて、結論が先にあってそこに都合のいい事実をはめ込んで主張する議論が出来なくなること、私は非常に危機感を持っています。

**司会** 政権政党と右翼政党だった自民党が、政権からはずれた分だけ節度を失って右にいく、過激になるという心配はある。一方で勢力が大きく衰えるという可能性もあると思うが。

**白川** いま右派は、市民運動的手法を取り入れて、勢力を増やしている。それが極右政党として議席をとるような形をとるのか、ないしは自民党がそこに純化するのか、そこは微妙なところ。つまり、この線で参議院選挙もやるのかどうかと。

**遠野** 横浜市長選では、民主党推薦、東京日産販売社長の林文子候補が、かなりの票をとると予想されていたが、自公の支援、外資系金融会社に勤めていた男性候補と伯仲し、3万5千票の差だった。これはどういうことなのか、新たな動向として分析が必要だ。

**白川** 地方自治体で当選している若い首長の特徴は、地方自治を経営効率化の観点で発想しやすいこと。もう一つは意外にナシヨナリストであることです。自民党のマニフェストはもう下野することを前提にした野党のマニフェストです。北朝鮮のミサイル攻撃に対して集団的自衛権の行使をはっきり言い、タカ派右翼路線を非常に鮮明に打ち出している。民主党が政権をとった場合に、右側から揺さぶりと圧力をかけるために出したという印象を強く持ちました。ただ、北朝鮮制裁論という点では民主党も共産党も同じです。この「北朝鮮の核・ミサイルの脅威に日本が晒されている」という図式をみんなが共有しているということが一番まずい。それを共有している限り、日米同盟強化、「核の傘」に入っていない

いじゃないかという理屈に引きずり込まれます。だから北朝鮮と対話路線で行くんだと言わなければいけないのです。

**司会** ミサイルが飛んできたらどうするんだというところからスタートしているから、それは誰でも「守らなきゃいけない」となるわけですよ。

**白川** 日経新聞の社説でも、北朝鮮が東京攻撃を宣言したときに、アメリカが核の先制不使用を言ったら北朝鮮はびびらないよと。だから核の先制不使用を米国に求めるのはおかしいと。そういう露骨な言い方です。でも考えてみたら核の傘理論はそういうことですよ。

**山口** 北朝鮮のミサイルが飛んできたら打ち落とせというのは社会的合意になっている。本来外交問題はいろいろなオプシオンがあることが強みのはずだけれど、他のオプシオンはない。「北朝鮮との対話を」と言えば「非国民」になる。

**遠野** だけどPAC3なんていう迎撃ミサイルは、全く役に立たないことははっきりしているのに、全然マスコミに出てこない。もし一発でもミサイルを打ち込めば自分たちがやられてしまうわけだからそんなことを北朝鮮がやるわけでもないでしょう。核を保有しても、アメリカやロシアが保有している核の数に比べれば全く太刀打ちできない。そう考えれば北朝鮮脅威論は空想的だということはわかるはずなのに。

**白川** アメリカ自身もアフガンについては増派すると言っているから、「核なき世界」を言っているから、ある意味では非常に揺れている。けれども米朝交渉は間違いなく進みますよ。袋叩きにあうかもしれないけど、アメリカに先んじて日朝交渉をやらうと言うしか活路はないと思います。

**遠野** 私は米国と東アジアの両方に足をかけて、安保・外交をやらうとしている民主党を応援したいと思います。鳩山論文をNYタイムズが掲載し、民主党勝利直後には、ホワイトハウスの報道官、国務省・国防省の高官が「普天間の代替施設や(海兵隊)グアム移転を日本政府と再交渉するつもりはない」と次々と発言し、その一方でオバマ鳩山電話会談を設定するなど、アメリカのやり方はすごく巧妙。負けないで頑張ってください。

### 市民に求められるもの

**司会** 安保・外交問題にしても労働者派遣法にしても、民主党が向こう側に行かないようなロビー活動をやる必要があるのではないか。社会運動の側が今まで以上に監視や圧力を強めていく余地と必要があるのではないですか。

**白川** 民主党の新人議員たちにたいして、安保についても派遣法についても運動の側が教育的な働きかけを精力的にやる、そういう意味でのロビー活動は大いにやったら

いいと思う。ただ大事なことは、それぞれの専門領域の要求だけを言うのではなく、働きかける側がどういう社会ビジョンを持つのかというところでお互い横につながるということと同時にやらなければだめじゃないか。それがほくの結論です。

**遠野** 私たちは民主党を選んだのだから、モニターし、支援するところは支援し、批判するところは批判する。そういう市民の力を発揮していかなければと思います。

**山口** 自分たちの運動の基礎は、ちよつと大げさに言うと、もうひとつの社会をつくるというビジョンにあります。地域社会に入っていない私たちのような人たちがいつのまにか自分たちの居場所となるような見えない別のレイヤー(層)を創る。最初に「総選挙眼中になし」と言ったのはそれ以上に重要なことがあって、それを今みんなで作っているということです。

**遠野** しかし、いずれ、子育て・老親の介護などで、地域で暮らすのだから、それぞれの活動を見えるようにして、既存のネットワークにつながっていくことも大事だと思います。

**司会** おもしろい話をうかがえました。ありがとうございます。(9月6日談)

# 「脱冷戦」の名による質的軍拡の危険性はらむ

鳩山政権の安保・外交政策の行方

杉原 浩司

9月9日、3党合意がまとまり、連立政

権樹立が固まった。安保・外交政策は、「日米地位協定の改定を提起し、米軍再編や在日米軍基地のあり方についても見直しの方向で臨む」という民主党マニフェストそのままの文言で決着した。民主党が、自党の政権公約の明記にすら抵抗したことは、新政権の脆弱性を早くもかいま見せた。

## 危険な寺島「緊急派遣軍」構想

翌日10日、新政権の外交政策を占う格好のテキストが登場した。鳩山氏の外交ブレーンである寺島実郎氏（日本総研会長）による「米中二極化『日本外交』のとるべき道」（『文藝春秋』10月号）だ。

寺島は、「対米協調」以外の原則を持たない日本外交を「思考停止」と批判し、世界秩序を米中による「G2化」（2国主導化）と見立てる。8月に出された「安保防衛懇」報告書や「核の傘論」を「冷戦型思考の産物」と斬って捨てる。そして、「脱冷戦型」外交原則の第1は米国と「大人の関係」になること、第2は米国をアジアから孤立さ

せないことだという。

「独立国に外国の軍隊が駐留し続けることは不自然だ」という常識を取り戻すべきだとして「日米安保同盟のあり方の根本的見直し」を主張する。

「日米の軍事同盟それ自体は大切にすべき」としたうえで、「東アジアに軍事的空白を作らない形で米軍基地の段階的縮小と地位協定の改定」を目指すべきだと指摘する。その際に最優先すべきは「前方展開兵力の必要性を原点から問い直すこと」と述べ、「オーバー・ザ・ホライズン・ポリシー」＝「緊急派遣軍構想」を提起する。「地平線の彼方」に控えつつ、有事に派遣軍を展開するいわゆる「有事駐留論」であり、従来から民主党が唱えていたものだ。「ハワイ・グアムに置く東アジア安定のための緊急派遣軍維持のためのコストを日本が応分負担」すれば米国も納得するといふのだ。そしてそれは、「日米韓提携構想」にもできるし、「コストの応分負担を専守防衛型軍事技術の共同開発費に向ける」可能性も検討に値するとしている。

## 軍需産業は大歓迎

寺島の論は、現状認識に納得できる部分もあるが、解決策には幻滅させられる。米軍のハワイやグアムへの「後退」は進行中であり、「軍事技術における革命」（RMA）を背景に、中国のミサイルの射程から逃れつつ、攻撃力を増強している。日本を前方展開兵力（原子力空母ジョージ・ワシントン機動部隊、巡航ミサイル原潜オハイオ、最新鋭ステルス戦闘機F22など）の拠点として維持すると同時に、米国の「盾」（ミサイル防衛列島）の役割も担わせる。ハワイやグアムの基地は急速に強化され、日本もハワイの米軍司令部に要員を送り、グアム周辺での空自と米空軍の共同実弾演習も繰り返されている。さらに、日米軍事再編の中で、グアムへの自衛隊訓練基地建設の構想が既に語られている。在沖米海兵隊のグアム移転経費の巨額負担が決まり、米海空軍基地の強化への血税投入計画さえ発覚した。

専守防衛型軍事技術の共同開発という提案に至っては、日米「軍産複合体」の喜ぶ顔が目につく。その先進例がミサイル防衛（MD）の日米共同開発（能力向上型SM3ミサイル）なのだろう。

私は、寺島の立ち位置と役割の危険性に警鐘を鳴らしてきた（本誌08年8月1日号参照）。彼は、「宇宙開発戦略専門調査会」の座長を担い、その報告書を踏まえて6月に

策定された「宇宙基本計画」は、MD用の早期警戒衛星の研究など宇宙の軍事利用に道を開いた。彼は、「スパイ防止法」など秘密保全のあり方を検討する「情報保全の在り方に関する有識者会議」（麻生前政権が設置）委員でもある。

不思議なのは、「脱冷戦」を掲げながら、東アジアの冷戦構造自体を解消するビジョンが欠落していることだ。米軍が後退しても、北朝鮮や中国に対する「抑止力」は強化され冷戦構造は温存される。東アジアは巨大なMD市場と化し、PAC3の拡大配備など日本のMD強化も加速している。MDこそが、中国に核・通常戦力増強の口実を提供している。

寺島構想は、志の低い陳腐なものだと言わざるを得ない。米軍事戦略の手のひらの上で踊り、足元をすくわれかねない危険なシナリオであることも強調したい。必要なのは、核・ミサイル軍縮の大胆な構想である。

### トマホーク保有論と非核地帯構想の並存

民主党自体の危険性にもふれよう。安保政策を主導する前原誠司、長島昭久、浅尾慶一郎（離党）らは、自民党以上に好戦的な「新国防族」だ。今や公然とトマホーク保有論を唱えている。自民党との違いは、北朝鮮との交渉期間を2012年までに設定したうえで導入するという「周到さ」ではない。また、兵器の国際共同開発など

に道を開く武器輸出禁止3原則の大幅緩和も持論だ。自民党国防族の政権転落と減少の中で、彼らは軍産複合体の期待を一身に背負うことになるだろう。

一方で、核軍縮では民主党は積極的な非核政策を掲げてきた。「民主党核軍縮推進議員連盟」（岡田克也会長）は「北東アジア非核地帯条約案」を作成し、非核地帯設置は党の政策ともなってきた。岡田は、米国の核の「先制不使用」（核攻撃された場合にのみ核を使用する）を働きかけるとも明言してきた。しかし、民主党はマニフェストに「非核地帯」の文言盛り込みを控えるなど、慎重姿勢を見せつつある。麻生前政権は先制不使用に反対し、廃棄目前の米核トマホークの復活を要望するなど、核軍縮を妨害し、10月にも骨格が決まるオバマ政権の「核態勢見直し」にも悪影響を与えていた。鳩山政権は、「核密約」調査・公開と同時に、速やかに核トマホークの退役と先制不使用への強力な支持を明言すべきだ。

### 「軍縮計画の大綱」を

私たちは、民主党の看板政策である「税金のムダづかい」見直しを、軍事を聖域とせず行なうことを要求すべきだろう。軍需利権の最大の温床であるMDに、精査のメスを入れられるかがリトマス試験紙だ。

民主党は、防衛省作成の2010年度予算概算要求の再提出を求めている。年末

作成の新防衛予算案はどの程度変わるのか。そして麻生前政権が年内に予定していた「防衛計画の大綱」改定を、民主党は来年以降に先送りするという。この2つの内容に私たちがどのような影響力を行使できるかが問われる。ピースデポの研究報告「脱軍備で平和と安全を」(<http://www.peacedepot.org/home/toyota/toppage.htm>)や、水島朝徳の「平和政策への視座転換―自衛隊の平和憲法的『解編』に向けて―」（深瀬忠一他編、北海道大学出版会刊『平和憲法の確保と新生』所収）などに手がかりを見出し、「軍縮計画の大綱」こそを要求したい。

試金石となるキーワードは「トマホーク」だ。（1）米軍核トマホーク退役の支持（2）日本のトマホーク保有の阻止（3）横須賀の米海軍トマホークの発射態勢解除と縮小・撤去という3段階は、そのまま軍縮プロセスと重なる。新たな「反トマ運動」が必要なのだ。そして、沖縄住民やハワイ・グアムの先住民、大軍拡計画を発表した韓国や豪州の反戦運動との連帯が欠かせないことを強調しておきたい。

（すぎはらこうじ、核とミサイル防衛にNO！キャンペーン）

#### 【参照】

『季刊ピープルズ・プラン』第47号（2009年夏号）所収 杉原浩司「北東アジア非核・非ミサイル地帯」に踏み出す時」

およそ20年前、はじめてキーボードに触ったときのことを思いだす。マシンへと差しこんだフロッピーに名前を入力しようとするのだが、めんどろでしかたがない。たった数文字なのに、といまなら思うのだが、当時のあの億劫さはなんだったのか。

左上のキーが「QWERTY」と並んでいる、「QWERTY（クワワーティ）配列」のキーボードを、多くの人間がそうであるように、わたしも使いつづけてきたが、この配列は、アメリカのタイプライターの歴史にさかのぼる。金属活字を叩きつづけるタイプストたちを調査し、

各キーの使用頻度にもとづいて、おおざっぱに言えば、頻度の高いキーは中央に、低いキーは周辺に並べられたらしい。この配置に辿りつくまでには、メーカー間の熾烈な競争があった。QWERTY配列が成立したのは、1882年である。

100年以上も前のキー配列が、なぜコンピュータのキーボードに踏襲され、いまだに使われているのか。また、使用頻度の調査は、英語を前提にしたはずで、日本語とはなんの関係もない。にもかかわらず、日本語を打つわれわれまでがQWERTY配列を使っているのはどうしてなのか。このあたりの事情は、『キーボード配列QWERTYの謎』（安岡孝一・安岡素子、NT

### 連載エッセイ第13回

## バランスのデザイン

T出版、2008年）に詳しい。とりあえず、つぎの点を押さえよう。QWERTY配列は、いま日本語をローマ字入力するには、利点はほとんどない。キー配列の理由を考へても意味がなく、ひたすら覚えこむほかない。

キーボードは、一見、だれにでも操作できるわかりやすい装置に思える。使用者とコンピュータを介在させる標準的なインターフェイスとして、広く使われている。だが、キーボードには分厚い前提が貼りついている。タイプライターの入力装置

をパソコンに援用したこと、英文の入力装置を日本語に流用したこと、ゆえにQWERTY配列には意味がないこと、などである。これらの前提を見ないふりをして、「ひたすら覚えこむように」とのなかば命令が、パソコン初心者の前に立ちほだかる。たとえば「A」が、なぜこの位置にあるのか、論理的に覚える手がかりはない。初心者は、ひたすらキーを探すことになる。これが、あのころの億劫さの正体だったのでないか。20年このかた、キーボード配列はまったくと言ってよいほど変革されていないにも

かわならず、操作に慣れてしまった。キーを探して叩くことが楽になったのではなく、めんどろくさに慣れてしまった。そしていまでは、キーボードを手放せない。

慣れが、多くの前提を見えなくしている例は、身の回りにおびただしくあるはずだが、なかなか見えてこない。デザインの新しさとは、その慣れを見せてくれるものを言う。そのいっぽうで、慣れをまったく無視した新製品だしたら、使いにくくて実用にならない。慣れと変革の微妙なバランスこそが、新しくも、古臭くも見せる。慣

### 鈴木一誌

れのバランスを変えるとき、新たなデザインが生まれる、とも言えそうだ。

わたしは、さっぱりダメだが、多くのひとが、携帯電話で文字列を打つのに慣れている。そのうち、携帯電話のキー配列がQWERTY配列を凌駕するかもしれないし、キーボードをまったく必要としないインターフェイスが出現する可能性がある。慣れ親しんだ〈家族〉や〈家〉のイメージも、そろそろ使用期限を過ぎつつある気がする。〈国家〉はどうなのか。組み合わせを変えずにバランスを変える、そんな観点から、周囲を見回してみたい。

（すずき・ひとし、グラフィック・デザイナー、題字デザインも筆者）

## 核兵器廃絶は可能だ

広島市長 秋葉 忠利

今年4月のオバマ演説以降、核廃絶をめぐる動きが一層活発になってきました。核や安保の問題を国の政策や国家間の交渉に任せるのではなく、自治体から核廃絶の気運と構想を作り出そうとの動きが注目されています。  
平和市長会議を主導する秋葉忠利広島市長より、公務で訪問中のメキシコから原稿が寄せられました。(見出しは編集部)

## パラダイムの転換

私が市長に就任した1999年以来、「国ではなく、個人でもなく、『都市』が平和宣言を発するのは何故なのか」という間に對して、平和宣言そのものが答になるよう努力をしてきました。世界を巡る情勢も変化していますし、それに対する私たちの考え方や対応の仕方にも変化が生じています。被爆体験を元に、様々な角度から都市の役割を考え、市民と共に行動し世界に呼び掛けてきた積りです。その結果、さらに世界が変わるわけですが、こうした一連の變化が「良循環」として私たちの望む結果につながることを期待しています。

「期待している」大きな理由は、世界的な規模で「パラダイムの転換」が起きていると考えられるからです。物事を見る上で大きな枠組みをパラダイムと呼び、それが変換することをパラダイムの転換と呼んでいます。一番典型的なのが、天動説から地動説への転換です。最近が発想の逆転とか、新しい発想をするとか、もうちょっと小さい意味でも使われます。核兵器の問題に

ついて、あるいは戦争とか平和の問題について、その他の情勢も含めて、非常に大きなパラダイムの転換が今起こりつつあると、私は思っているのですが、どんな転換なのかを説明するために、特に広島から見える4つの側面を挙げておきます。

第1は、報復から和解へという転換です。2つ目は、国家中心の考え方ではなくて、都市を中心に物事を考えていきたいと思います。この発想の転換です。それから、専門家は当然必要ですが、専門家に任せ切りにするのではなく、市民があらゆる面で参加をして行こう、というのが3つ目です。

4つ目が、イデオロギーが主導するような考え方・行動から、人間中心、あるいは人間の日々の生活という現実を元に物事が動き始めている、という点です。詳細は、広島市のホームページから、私のスピーチやプレゼンテーションにアクセスしてお読み頂ければ幸いです。ごく簡単な説明を付け加えておきます。

最初の、報復が和解に転換しているという点なのですが、これは、被爆者のメッセージそのものです。被爆者の皆さんが良

く口にする、簡単ではありませんが大切な言葉は、「こんな思いを他の誰にもさせてはならない」です。自分自身の辛い体験を他の人にさせてはいけなく、という意味です。大事なのは、「他の誰にも」という中に、通常なら敵だと思われる人たちも入っているという点です。これが和解の意味です。この哲学が世界的にも広がっています。

「こんな思いを他の誰にもさせない」ためには核兵器の廃絶が必要です。こうした被爆者の思いを、都市として真正面から受け止めて行動をしなくてはならぬという決意で、1982年に当時の荒木市長が提唱して平和市長会議という組織を作りました。

## 2020ビジョンの実現を

その後、世界の情勢が悪化し、世界の全ての国が核兵器を作ったり持ったりするよくな状況さえ、可能性として心配しなくてはならなくなり、それを何とか阻止しなくてはならないという思いで、2003年に平和市長会議では2020ビジョンという計画を作りました。別名は核兵器廃絶のための緊急行動です。目標は、2020年ま

でに核兵器を廃絶することですが、中間目標として2015年までに核兵器の禁止条約を作ろうというものです。

去年それをさらに強めるために、ヒロシマ・ナガサキ議定書という文書を発表しました。温暖化問題において京都議定書が果たしたような役割を、核兵器廃絶の分野で今度はヒロシマ・ナガサキ議定書に果たして貰おうというもので、今から2020年までに具体的に何をすれば良いのかを、そのまま、例えば国連で採択して貰っても大丈夫なような、かつ短い文書として書き上げ、それを発表しました。今、我々の目的は、来年開かれる核不拡散条約の再検討会議でこの文書を、何らかの形で認めて貰う、あるいは位置付けて貰うということです。

この運動の中で、非常に重要な役割を果たしてくれているのが、全米市長会議という、アメリカの人口3万以上の都市約1200が集まって作っている組織です。この全米市長会議はこれまで5回、満場一致で、平和市長会議の2020ビジョンキャンペーンを支持する決議を採択してくれています。今年の6月に、これも満場一致で採択された決議は、2020年までの核兵器廃絶に向けての多国間交渉を開始するよう、オバマ大統領が、来年開かれるNPTの再検討会議で呼び掛けるべきだという内容です。

オバマ大統領のプラハ演説と合せて考え

ると、アメリカの市民レベルの活動に期待が持てますし、アメリカの大統領や都市と手を組んで日本政府そして都市が、今まで以上に大きな役割を果たす必要があることも分ります。

### 核廃絶には都市の役割が重要

世界の都市に目を転ずると、2003年の時点では560ほどだった平和市長会議の加盟都市は、現在、3104都市に増えました。去年1年だけでも、600近くの都市が加盟してくれています。つまり、1日に2都市くらいが加盟しています。これらの都市の人口を合わせると、現在時点で約6億人、来年のNPT再検討会議までの目標5千都市が実現すれば約10億人になります。都市レベルでは核兵器の廃絶が非常に重要な問題だという認識があるということ、そして都市の歴史や都市の役割がこの点に大きく関わっています。

人類の歴史を振り返ると、それは悲劇の歴史であると言って良いほど人類は様々な悲劇を経験してきました。その苦楽を、市民の皆さんと共に生きてきているのが都市です。だからこそ、世界的に大きな悲劇には必ずと言って良いほど都市の名前が付いています。ピカソの絵で有名なゲルニカ、アウシュビッツ、広島等々、申し上げるまでもありません。それは、都市レベルでこそ市民一人一人、人間一人一人の苦しみ

分り、共有されているからだと思います。

ベルギーのイーペル市の例が分り易いかも知れませんが。第一次世界大戦中、1915年に、ドイツが初めて毒ガス兵器を使った都市ですが、通常の爆弾でも壊滅的な被害を受け街全体が灰燼に帰したことで知られています。復興の仕方もユニークなのですがそれは別の機会に譲ることにして、去年、第一次世界大戦の休戦から90周年を迎えました。1918年の11月11日11時に、終戦協定が結ばれたのですが、それを記念して大きな式典が開かれました。

昨年だけではなく、このイーペル市は第一次世界大戦中の戦没者慰霊のための式典を90年以上経った今でも毎日開いています。それは、都市としての記憶をずっと未来にも生かしていく決意の表明でもあります。このイーペル市のように、あるいは、ゲルニカのように、ヒロシマのメッセージを受け止めた都市は、自分たちの都市の歴史と重ね合わせ、現代で一番象徴的な核兵器の被害に鑑み、そして人類絶滅を避けるため、ヒロシマ・ナガサキと共に未来を創ろうと決意し、2020年までの核兵器の廃絶のために立ち上がってくれているのです。

幸いなことに、外交の専門家の中からも、市民や都市の役割を評価する動きが出てきています。一人だけ、ウリ・サビールという人を紹介しておきたいと思えます。彼は、イスラエルの国会議員だった人で、パレ

スチナとの間の和平協定を作る交渉（オスロ・プロセス）のイスラエル側の首席代表でした。彼の最近の著書が、『Peace First』つまり『平和最優先』です。

その中で、近年、平和条約や平和協定がなぜ上手く機能しないのかについて、八つの理由を挙げて説明しています。例えば、「戦争を指導している人が、実は利害関係の相反があるにも拘らず、平和交渉の代表になって平和交渉をまとめようとしている」というようなこと、それから「狭い安全保障主義に縛られている」といったことを合せて全部で八つ挙げてあります。

こうした分析の結果として、彼が提唱しているのは、「これからの平和を創っていく上で大事なのは、八つの理由をそのままにしておいて国と国との間での交渉を外交官、あるいは国の幹部に任せるのではなく、市民が参加する参加型外交を展開すること」になるのです。

### 平和市長会議に加盟を

このように、パラダイムの転換が起こりつつあることは、いろいろな面に現れているのですが、それを加速化し、より大きな目標につなげるために、皆さんにお願いをしておきたいことが一つあります。

これまで色々な事情があって、日本の都市には平和市長会議への加盟要請を始めていませんでした。しかし、昨年から要請を始め今では380以上の都市に加盟して頂いています。

加盟するにあたって、入会金や年会費は不要です。広島、長崎がずっと負担をしてくれています。勿論、寄付は喜んで頂きます。

皆さんがお住みになっている都市、あるいは出身地、あるいは何か仕事・学校等で関わりのある都市にアプローチをして頂いて、まだ平和市長会議に入ってなければ是非加盟するようにお勧め頂きたいと思えます。その時に説得の仕方として役立つのは、核兵器の廃絶は世界の圧倒的多数の声だということなのです。例えば核不拡散条約（NPT）。

これは核保有国に対して、とにもかくにも、核兵器廃絶のために努力をしなければならない、と言っている唯一の条約です。そしてその目標は核兵器の廃絶です。この条約に署名し批准をしている国が190カ国です。国連の加盟国が192ですから、圧倒的多数です。非核兵器地帯条約の署名国が113カ国・地域、これも過半数です。それから日本の外務省は「究極的に核兵器を廃絶しましょう」という決議案を毎年国連に出しています。賛成をしてくれた国は、昨年173カ国。反対したのはアメリカ、北朝鮮、インド、イスラエルの4カ国です。

今年の5月には、オバマ大統領は「核兵器のない世界」の実現を目指すことを明言し、世界に希望を与えています。今年の平和宣言で私は、「オバマジョリティー」という言葉を使いましたが、これは、今年5月にNPT再検討会議準備委員会でのス

ピーチ中使った造語で、「オバマ（大統領）」と「マジョリティー（多数派）」を連結したものです。オバマ大統領が掲げる「核兵器のない世界」の実現の追求に賛同する世界の過半数の国々や大多数の市民を表わすのと同時に、オバマ大統領に任せ切りでは核兵器の廃絶が実現しない現実をきちんと認識して、私たち市民や都市がさらなる努力を続ける決意を表わす言葉です。

また、核兵器を廃絶するためには、どうしてもオバマ大統領をはじめ、核保有国の首脳協力が必要です。その意志のあることを表明した初めてのアメリカ大統領オバマ氏をアメリカ国内でも、世界でも孤立させず、共に核兵器のない世界を創るためには、世界の多数派の良識ある声がどうしても必要であることを訴える意味もあります。

最後に、今年8月7日から10日まで、平和市長会議は4年に1度の総会を長崎市で開催し、世界33カ国から134都市が参加して今後の活動方針等を協議しました。この会議でもオバマ大統領を高く評価する声が多く聞かれ、核兵器廃絶と世界恒久平和に向け、世界の都市と市民の期待がこれまでになく高まっていること、共に行動する決意の固いことを実感しました。

私たちはオバマジョリティーとして、力を合わせ核兵器を廃絶しなくてはなりません。それは可能です。Yes, we can!

（あきは・たたとし、広島市長）

# 平和宣言

人類絶滅兵器・原子爆弾が広島市民の上に投下されてから64年、どんな言葉を使っても言い尽せない被爆者の苦しみは今でも続いています。64年前の放射線が未だに身体を蝕み、64年前の記憶が昨日のことに蘇り続けるからです。

幸いなことに、被爆体験の重みは法的にも支えられています。原爆の人体への影響が未だに解明されていない事実を謙虚に受け止めた勇氣ある司法判断がその好例です。

日本政府は、「黒い雨降地域」や海外の被爆者も含め高齢化した被爆者の実態に即した援護策を充実すると共に、今こそ省庁の壁を取り払い、「こんな思いを他の誰にもさせてはならぬ」という被爆者たちの悲願を実現するため、2020年までの核兵器廃絶運動の旗手として世界をリードすべきです。

今年4月には米国のオバマ大統領がプラハで、「核兵器を使った唯一の国として」、「核兵器のない世界」実現のために努力する「道義的責任」があることを明言しました。核兵器の廃絶は、被爆者のみならず世界の大多数の市民並び



秋葉市長による平和宣言 (写真提供: 広島市)

に国々の声であり、その声にオバマ大統領が耳を傾けたことは、「廃絶されることにしか意味のない核兵器」の位置付けを確固たるものにししました。

それに応じて私たちには、オバマ大統領を支持し、核兵器廃絶のために活動する責任があります。この点を強調するため、世界の多数派である私たち自身を「オバマジョリティー」と呼び、力を合せて2020年までに核兵器の廃絶を実現しようと世界に呼び掛けます。その思いは、世界的評価が益々高まる日本国憲法に凝縮されています。

全世界からの加盟都市が3000を超えた平和市長会議では、「2020ビジョン」を具体化した「ヒロシマ・ナガサキ議定書」を、来年のNPT再検討会議で採択して貰うため全力疾走しています。採択後の筋書は、核実験を強行した北朝鮮等、全ての国における核兵器取得・配備の即時停止、核保有国・疑惑国等の首脳の被爆地訪問、国連軍縮特別総会の早期開催、2015年までの核兵器禁止条約締結を目指す交渉開始、そして、2020年までの全ての核兵器廃絶を想定しています。明日から長崎市で開かれる平和市長会議の総会で、さらに詳細な計画を策定します。

2020年が大切なのは、一人でも多くの被爆者と共に核兵器の廃絶される日を迎えたからです。また私たちの世代が核兵器を廃絶しなければ、次の世代への最低限の責任さえ果たしたことになるからです。

核兵器廃絶を視野に入れ積極的な活動を始めたグローバル・ゼロや核不拡散・核軍縮に関する国際委員会等、世界的影響力を持つ人々にも、2020年を目指す輪に加わって頂きたいと願っています。

対人地雷の禁止、グラミン銀行による貧困からの解放、温暖化の防止等、大多数の世界市民の意思を尊重し市民の力で問題を解決する地球規模の民主主義が今、正に発芽しつつあります。その芽を伸ばし、さらに大きな問題を解決するためには、国連の中にこれら市民の声が直接届く仕組みを創る必要があります。例えば、これまで戦争等の大きな悲劇を体験してきた都市100、そして、人口の多い都市100、計200都市からなる国連の下院を創設し、現在の国連総会を上院とすることも一案です。

被爆64周年の平和記念式典に当り、私たちは原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げ、長崎市と共に、また世界の多数派の市民そして国々と共に、核兵器のない世界実現のため渾身の力を振り絞ることをここに誓います。

最後に、英語で世界に呼び掛けます。  
We have the power. We have the responsibility. And we are the Obamajority. Together, we can abolish nuclear weapons. Yes, we can.

2009年(平成21年)8月6日

広島市長 秋葉 忠利

# ヒロシマ・デーとナガサキ・デーの今年

諸橋 泰樹

## 官憲の多さと右翼の台頭の中で

今年の8・6ヒロシマと8・9ナガサキは、機動隊の数が例年になく多い、というのが第一印象だった。それは、8・15の東京も同様で、小泉・安倍政権のバックラッシュ（反動）を背景に台頭してきていた右翼団体の勢力が活発化していることを思わせる。月末の総選挙で麻生政権が解散し、民主党に政権交代するだろうというもつぱらの世評も、右翼に危機感を募らせている原因になっているということがあるかもしれない。

8・15靖国神社そばの神保町や九段下で、大音量で「朝鮮人系日本人は出てゆけ」などとおらび上げる右翼の街宣車を、機動隊



がバリケードを張って通さないようにしている光景も異様であれば、8・6原爆ドーム前のダインおよび集会後に中国電力

前まで機動隊にサンドイッチされてのデモ行進もまたみじめなものであった。

もちろん警察権力は、（おそらくは）デモをする市民や通行人に危害があつてはいけな、祈念式典に出席したり靖国に参拝する要人に危害があつてはいけな、交通に支障が出てはいけな、右翼団体の暴力行為を（おそらくは）取り締まらねば、という治安の面から出動に当たっているのだろう。若い機動隊員自身は、眼の前の右翼の暴力的な示威行動を体験して、この団体にどのようなイデオロギー的・風俗的背景があるのかを考え、市民による平和的な主張・行動にはどのような思想的背景や個人的思いがあるのかを考えたりしているのだろうか。

## 米・オバマ演説の危うさと連帯

とは言え8・6ヒロシマデーは、4月5日、オバマ米新大統領の「プラハ演説」において「核兵器を使用したことがある唯一の国として核兵器のない世界を実現する道義的責任がある」という旨の発言に力を得て、ある希望の空気に満ちていたことは確かだ。秋葉忠利広島市長は平和祈念式での「平和宣言」において、核兵器の廃絶を願う人びとは世界のマジョリティーであり、これを「オバマジョリティー」と名づけて米大統領を支持した。

もっとも、したたかな米国は、「8・6広

島平和のつどい2009」で配られた「市民による平和宣言2009」も指摘するようには、ロシア・中国に対する核抑止力を維持した上で核がテロリストの手に渡らないよう核軍縮するというのがその目的だから、手放してオバマ発言を支持するわけにはいかない。が、いい意味でこれもまたしたたかな秋葉市長は、そのことを百も承知で人氣のオバマを味方につけ、またオバマの核戦略行動に対して機先を制しようとしているのだろう。

原爆資料館の渡り廊下の下では、「オバマジョリティー」とプリントしたTシャツ姿の高校生たちが、パネルの前で解説をしたり、参加者から写真を撮られたりしていた。

## 軍事基地・呉港の戦前と戦後の連続

「つどい」では、いつも読者懇談会の会場を借りているたんぼ舎の柳田真さん、またピースデポ代表となつて東京に戻ってきた湯浅一郎さんなども見かけ、8時15分のドーム前ダイン、集会、デモ、最後に中電前座り込み集会の一連の行動に参加した。午後からは、その一環としての「ヒロシマ・スタディ・ツアー」に参加して宇品港からフェリーに乗り、ピースリンク広島・呉・岩国の平賀伸一さんと湯浅さんのガイドで広島湾の戦争遺跡と軍事史跡を視察、呉港で下船して、旧呉海軍工廠（こ

しよう、現海上自衛隊呉基地および軍事工場の様子を、「歴史の見える丘」から初めて観た。9・11をきっかけにアフガニスタンやインド洋に何隻も戦艦が出航して行ったところである。

「平和都市・広島」からいくらかも離れていないところに、大和ミュージアムが存在しこういった軍都が広がっている光景もまた、機動隊に護られた8・15の都内や8・6のデモと同様、異様である。

### 被爆地を踏みにじる田母神講演会

夕方に広島市内に戻り、こともあろうにこの8月6日夕方に日本会議広島支部主催で行われる田母神俊雄元航空幕僚長による「ヒロシマの平和を疑う」という核武装講演会場のメルパルクホール界隈をウォッチングした。夕方の平和記念公園はひきもきらず人が訪れ、ドーム前では労組などの集會が続いている。旧広島市民球場周辺には機動隊員や警官の姿も目についたが、右翼の街宣車が田母神講演を支持する演説を会場前でしたり、反対するデモ隊が会場前でシユプレヒコールを上げるようなシーンは、報道によるともみ合いがあったとのことだが、少なくとも開場時間前後には見られなかった。

ただし、開場30分くらい前から、黒い背広姿の、いかにもそれらしい格好の男たちが何人もメルパルクに入ってゆくのを見た。

その後、メルパルク正面にあたる相生通りの1本裏道の飲み屋でビールを呑みながらいつでも飛び出せるようにしていたところ、歩いて1分ほどのドーム前でテレビ中継をしているのを店内で見た。多分被爆者がアナウンサーに答えているのだが、その背後に右翼の街宣車による兵隊ラッパ（突撃ラッパ）の音が入ってき、2人の会話がよく聞き取れないほどであった。間もなくその突撃ラッパの音は店内にも聞こえてきたので、すぐに相生通りへ出たが、その時には通り過ぎたあとだった。メディアの現実と、現場の現実とはズレがある。

### 長崎市長の毎年の感動宣言

8月9日は、炎天下、平和祈念式典に出た。田上富久市長は「長崎平和宣言」で、核を保有する10カ国の指導者全員の名前を、原稿に眼を落とすことなく正面を見据えて、被爆地長崎へ来て資料館を訪れ被曝の跡地に立ってみてほしいと呼びかけた。また、ミゲル・テコスト・ブロックマン第63回国連総会議長は、今日のジョージ・オーウェルの世界においては核攻撃の脅威は「抑止」と呼ばれ、お互いの恐怖は「安定」と呼ば



8月9日、長崎平和祈念像前にて

れ、しかも「軍縮」は兵器の近代化を意味していると述べて、この「不誠実で偽善的な詭弁」をやめるべきだと語った。

この2つの話を直接聞いたことは、2年前の、「政治家たちの誤った原爆認識」について言及した長崎平和宣言を現場で聞いたことと併せて、生涯忘れることはないだろう。

核武装についての発言も多かった麻生太郎首相は、月末、衆院選において、「原爆投下は仕方なかった」と誤った原爆認識を持つたり、「核に対抗するには核が世界の常識」と公然と言い放つ元大臣らが落選したこと、他にも少なからぬタカ派与党人たちが落選したり比例区で辛勝したこと、何よりも与党の議席を激減させたことで、その命脈が尽きることとなる。安倍、福田、麻生ら歴代首相たちはみな毎年9月に自壊してきたが、原爆投下く敗戦に至る「8月の反省」を、政府・自民党が怠ってきたことの帰結なのかもしれない。

（もろはしたいいき、本誌編集委員、写真提供も）



運動の現場から

## 非暴力平和隊・日本

選挙監視中、村々の人々を集めて話を聞く

### 非暴力が平和をつくる

大畑 豊

#### 非暴力介入による紛争解決

メデアアでは、日々紛争地での爆撃、撃ち合い、殺し合い



の映像が流れ、紛争地においては暴力が支配している、というイメージしか持てないかもしれませんが、そのような地においても必ずと言って良いくらい、非暴力による紛争解決をしようと努力している個人、団体があります。いま、平和、非軍事・非暴力による紛争解決を希求する国際社会に求められているのは、こうした非暴力による紛争解決に努力している人たちを孤立させず、支援していくことです。組織的な非暴力介入の活動は1980年代からさかんに行なわれるようになり、現在では20ほどの団体が活動をしています。

非暴力介入の特徴的活動として護衛的同行というものがあります。例えば非暴力平和隊 (Nonviolent Peaceforce, NP) [注] が現在活動しているスリランカ、フィリピンなどでは人権活動や平和運動をしていることにより、その本人や家族に暗殺・

誘拐等の危害が加えられることがあります。そうした危害・脅迫ゆえに活動の中止や一時停止を余儀なくされることがあります。そのようなときに外国人・国際人がともにいることによって現地の人を危害から守ることができる、ということがこれまでの経験で実証されてきています。いわば非武装のボディーガードです。現地の活動家の安全を守ることによって、現地の人たちの手による紛争解決を側面から支援していくものです。

よく Making Peace、平和をつくる、ということが言われますが、私たちのしていることは Making Space for Peace、平和づくりのための空間・環境をつくるということになります。Making Peaceはその地域の文化、慣習、法律、社会状況を熟知している現地の人たちによってする、できる。ただそうした活動を暴力により妨害する状況があるのなら、私たち外国人がそこにいることによってそうした危害を予防する。私たちがそこに現実にいること (プレゼンス) によって世界の人びとの憂慮の念を物理的に、敵対する勢力に対し示すとともに、殺し合い、脅し合いではなく、話し合いによる解決を促すものです。紛争解決そのものにはNPは関与しません。これは自治・自決権の尊重という原則でもありません。護衛的同行のほか、話合いの仲介、不当な逮捕・人権侵害等に対して世界中の支

援者から当該政府・団体にメール、ファックスなどを集中的に送り国際的圧力をかける緊急行動ネットワーク、ネットワーク構築支援などの活動があります。

## 非暴力の希望

深刻化した紛争に対しては、非暴力の手法を用いることについて一筋縄ではいかないう課題ももちろん残ります。しかしさらに答えに窮する疑問が、武力による「解決」に投げかけられています。

非軍事・非暴力という非現実的・理想主義といわれますが、私たちがこそが現実主義者であると確信しています。軍事費は毎年増え続け、現在世界では1年間に1兆4640億ドル(2008年)、1時間あたりすると167億円のお金を使い続けています。平和隊の目指す2000人規模での活動はこの30分ぶんのお金80億円です。することができ、またこの世界の軍事費の3分の1の費用で、飢餓、難民、エイズ、砂漠化、核兵器・地雷の廃棄等人類のかかえるほとんどの問題が解決できると試算されています。未来永劫、莫大な軍事費を払い続けて、不安な時代を生き続けるのか、その3分の1の費用で建設的プログラムを進めるのとどちらが現実的か。

非暴力、特に組織的な非暴力介入は最近始まったばかりの活動であり、人類の歴史以来ある武力・軍事介入に比べたらノウハ

ウの蓄積はまだまだこれからです。

非暴力による平和構築には、軍事作戦のように短期に「勝敗」が明らかになるものでもなく、それを見て、だめだ、と言うのは将来的影響を考えずに言っているようなものです。ではまた血で血を洗う世界に戻るのか、ということ。やっぱりだめじゃないか、ではなく、ではどうしたらいいか、人類の英知を殺し合いでなく、和解のためにいかに結集していくかということが、21世紀に生きる私たちに問われていると思います。

(おおはた・ゆたか、非暴力平和隊・日本(NPJ) 共同代表 ohata-yu@caacp.org)

【参考文献】「非武装のPKO NGO非暴力平和隊の理念と活動」明石書店、君島東彦編著、ウェブサイト：<http://np-japan.org/>

## 非暴力平和隊の活動を 通して

徳留 由美

私は非暴力平和隊(NPJ)のメンバーとして、フィリピン・

ミンダナオ島とスリランカへと赴任しま

した。スリランカへは2007年の12月に



赴任し、翌年2008年の12月中旬まで活動していました。

私はNPJの活動を通して、「活動地域における暴力の減少」、「我々が同行・存在することで、人々が安全に感じる」、「市民社会団体が彼らの活動を促進できるように、安全面を支援する」、「市民が自分たちの権利を主張できる」、「異なる民族間(シンハラ・タミル・ムスリム)の関係の改善」、そして「ネットワークの構築―連携やリンクにより人々への救済が可能になる」を目標とし、チームと共に活動を続けました。

NPJは現在、コロンボ市にスリランカ・プロジェクトのメイン・オフィス置き、北のジャフナ、東部のワラチャナイとバティカロアにローカル・オフィスを展開しています。私が配属された時には、その他に北東部州の主要都市であるトリンコムリーとムートルにもオフィスがありました。スリランカ情勢の諸事情により、現在は閉鎖されています。

私はスリランカへ赴任してから2週間後にトリンコムリー・オフィスへと配属され、児童保護の担当として働きました。トリンコムリーは天然の良港を持ち、第二次世界大戦時には、日本軍が空爆を行った場所でもあります。この地域では、2006年に、スリランカ政府軍とLTTE(タミルイーラム解放のトラ)が激戦を繰り広げ、最後の激戦区となったムラティブにも繋がって

スリランカ兵士と共に市民団体の路上活動に同行



り、政府軍にとって戦略的に重要な地域でした。

私が配属されていた期間中は、比較的大きな衝突は起こりませんでした。それはトリンコマリーに厳重な軍の警備が敷かれていたことも、影響しているでしょう。

2008年1月2日にスリランカ政府が停戦合意を破棄、その後、戦局は激しさを増し、犠牲となる市民の数が急激に増加しました。そのような中で、約20年ぶりに東部州議会選挙が行なわれました。NPは国際選挙監視団として、トリンコマリー県の投票所のモニタリングを投票2週間前から始めました。脅迫・身代金誘拐・恐喝など、選挙期間中には無抵抗な市民が巻き込まれており、我々が町や村々を「世界の目」として巡回したり、我々のオフィスに被害届を出してくる人たちに対応しました。

紛争の激化に伴い、誘拐され強制的に児童兵士にされながらも、逃れてきた子どもたちの数も増え、彼ら

の安全場所への同行や、場所の確保も重要さを増し、ユニセフや他の児童保護団体と連携して、活動を行ないました。

私がスリランカから離れた後も紛争は激しさを増し、国内避難民の数も今年に入り増加しました。2009年5月17日にLTTEが敗北宣言を出し、スリランカ政府は勝利宣言・紛争終結宣言を出しました。しかし、「本当に終結し、皆が幸せなのか？」という疑問は残ります。国際団体等が最後の激戦地域であったムラティブへのアクセスが不可能である状況は続いており、残された市民の安否が心配されます。

また、国内避難所や、避難民となった人々の生活の保障や、民族間の根本的な問題についても問題が山積みであると思われま

す。日本政府からスリランカ政府に対し、経済援助などが行なわれていますが、日本国民として、また現地で市民と生活した者として望む事は、スリランカ政府が一般市民に向けて行なった非人道的な武力行使を日本政府が正当化せず、資金援助する以上、綿密な調査を行なって欲しいということです。

日本国内でも生活苦を抱えている人が多く、中、そのような市民から出た援助金が、スリランカ国内の本当に支援を必要としている人達へ届くように、強く要請したいです。

スリランカは第二次世界大戦後の、サン

フランシスコ講和会議で、憎悪は憎悪によって止むことはない、と日本へ戦後賠償保障を放棄した国でもあります。そのような「慈悲」の心を、シンハラとタミルと民族は違いますが、二つの民族は「スリランカ国民」であり、同国内での「平和的調和」が生まれることを、願わずにはいられません。

短い期間でしたが、市民と時間と空間を共有し、将来に繋がる活動ができたことを願っています。今はすぐその結果が見えなくとも、10年後、20年後先の平和を望む人達の活動の為の足がかりを作る、その準備に少しでも貢献できたことを願っています。(とくどめ・ゆみ、元NPフィールド・メンバー、写真提供も)

注【非暴力平和隊】世界各地の紛争地に、非暴力的な手法に関するトレーニングを受けた市民を派遣し、暴力・軍事力によらない紛争の解決を促進することを目指す国際NGO。2002年12月、インドで発足し、国際事務局はベルギーのブリュッセル。地元の非暴力・平和団体や人権活動家と協力し、地元活動家や地域住民等に対する脅迫、暴力等を軽減させ、地域紛争が非暴力的に地元の人によって解決できるよう、支援することを目的としている。

# 運動から 現場を知っていますか

丹羽 雅代

JR渋谷駅南口のすぐ横、国道246号線とJR山手線が立体交差するガード下に246キッチンはある。

といつても建物があるわけでもないし、常設の場所でもない。路上や公園で暮らすおじさんたちの誰かが、「そうめんが一杯手に入ったよ」「まだ十分食べられる上等のお肉をもってきた」「そうそう、じゃがいもが一杯ある」といったような話を、グループのらの主催者いちむらみさこさんに届けてくれてタイミングが合ったとき、キッチンオープン日時は決まる。1週間毎に開かれる場合もあれば1カ月以上先のこともある。ひっそり楽しい、いい時間と場所だ。そこで提供されるお料理は飛び切りおいしい。ヨーロッパ帰りのシェフが秘蔵のナイフを使って腕を振るったり、高円寺のベジタリアン料理店オーナーの出番の場合もある。この道ウン十年の超ベテランデパートマネキンさんの口八丁手八丁料理もオープンとの連絡は口コミやメールだ。

246ガード下には、結構多くの人住む。常住者もいるし時々住人もいる。女性も複数。いちむらみさこさんは時々泊まる。ポストだってあるし、郵便物だって届く。いちむらみさこさん(37ページ参照)が246に住

みだしたのは、放火事件がきっかけだった。人のいなくなったダンボールハウスが、冬のある日炎上した。壁と地面に、真っ黒に焼け跡が残って、一挙に無残な場所になってしまった。そこにいちむらみさこさんは野宿し始める。黒焦げの壁に星をあふれるほど貼り付けて、着ている黒のジャケットの背中に☆のアプリーケをして、通行人に、流れ星が落ちてきたみたいに見えるように背中を向けて。2007年の12月のことだ。「ダンボールに入らないで路上に寝るのは、とても寒かったよ。でもこの場所をなんとかしても意味ある場所にしたかった」そんな想いをいちむらみさこさんは語ってくれた。

そこに住んでいたおじさんは場所を変えてしまったらしい。あるいは身体を壊して入院されたか。ダンボールハウスや路上で生活する人には男女を問わずコミュニケーションを拒否する人もいるし、気難しく見えることも多いが、いちむらみさこさんはめげない(ように見える)。そのうち、前述のキッチンが始まった。ガスボンベコンロやちゃぶ台が持ち込まれる。水は駅横の公衆トイレから運ぶ。障害者用トイレがあいていればそちらを拝借して野菜も食器も洗う。お茶碗やおわんもお皿もたくさん。どれも捨てられていたものや落ちていたものだ。

路上にべったり座ってみる風景はなかなか。いつもは見ると側にいるはずの道行く人が、見られることを楽しむことは決して

なく、気持ち顔を背けて足早に通り過ぎる。それをじろじろ見るのはなかなか面白い。対等な出会い直しに近づきたいと思っても、簡単には乗り越えられるものではないと思いい知る。似たような体験を思い出した。『劇団変』という脳性マヒの女性表現者キム・マンリさんの舞台を初めてみたときだ。観客を舞台上に誘い出し、カップラーメンを作らせ、そしてそれを食べさせると要求する、戸惑いながらもこたえてきこちない手つきで食べさせる客。それを観客はこれまた笑っているのか戸惑いながら凝視する。眼をそむけるのでなく出会い直す、私にはとても大事な問いかけだと感じられる。

たっぷりできた食事は、そこにいる人みなに振舞われる。離れた場所のシャイなおじさんにも運んでみる。「もうおなか一杯だから」と断る人も、おいに誘われて次はやってきたりする。みんなで一緒に食べご飯は本当においしい。

余っている食べ物があったらください、という人と、カンパを出すという人もいる。できればお金はもらいたくない。余っているものを回してもらうことに意味がある。捨てられるものが少しでも減ること、捨てられているものが再生すること、捨てるべきものは一つもないということ……246キッチンが問いかけてくるものは、とても大きい。

(にわ・まさよ、アジア女性資料センター)

# のら 定額給付金を 運動場 反貧困カンパへ 300万円達成！

吉田 和雄

8月1日、「定額給付金を社会連帯に！三多摩市民基金」感謝の報告集会在が東京・立川で行われ50名が参加した。

この基金は鎌田慧さん、吉川勇一さん、諸橋泰樹さんから三多摩在住の人びとの呼びかけで設立され、ホームレス、在日外国人、家庭内暴力(DV)被害者など定額給付金が渡らない社会的弱者たちの支援グループに寄付金全額が贈られた。

立川市議の大沢豊さんが「生活に困窮し必要な人にバラマキの定額給付金が行き渡らないのはおかしいと基金運動を始めた。4月から7月までに三多摩地域の市民を中心に310万円以上が集まった。本当にお金を必要としている人を支援できる基金があつてよかつた、などの感想が多く寄せられた」と経過報告。金額が記入されたパネルの目録が鎌田慧さんから各団体の代表に手渡された。

続いて寄付を受けた団体からの活動紹介。トヨタのお膝元、豊田市の保見ヶ丘ラテンアメリカセンターの谷口さんは「9千人の団地で日系ブラジル人が4千人、住民の

鎌田さんから寄付金が手渡された(写真提供/繁山達郎)



45%が外国人。ことば、医療、教育、仕事などの困難があるが、地域にとけ込んでいゑる。子どもたちの教育支援などに取り組んでいる。親の失業給付が切れると先が見えない。『まだ食糧を配らないんですか』と問われても『毎週土曜だけなんです』と返すのが精一杯」と窮状を訴えた。

反貧困たすけあいネットワークからは首都圏青年ユニオンの山田さんが報告。「安全にお金を借りられるところはないかと若者が先日にも相談にきた。職場は見つけたが交通費がないと。こういう人に私たちは1日千円10日間分を援助している。ハケンを選んだのも失業したのも自己責任と切り捨てられる。助け合いが今ほど必要などきはない。」

女性と貧困ネットワークの藤田さんは「給付金が世帯単位で支給されることに違和感。家族や婚姻制度から排除された女性もDV被害者もいる。貧

困問題でも女性の問題が出てこない。時給800円のパートで働く女性など、働く女性の4割が年収200万円以下。『かたりれん』という語り合いを公民館などで月1回やっているが、宣伝しないのに人が集まる。みんな関係を求めている」と訴えた。

三多摩野宿者人権ネットワークの星さんは「施設に同居させ生活保護費の8割をピンハネする貧困ビジネスを行政はこれまで黙認してきた。今年の派遣村のたたかい以降、ホームレスの人の直接居宅保護を勝ち取りつつある」など運動の成果を報告した。鎌田さんは「定額給付金は貰っても貰わなくてもしやくにさわる。だったら、市民に配り直そうと基金に取り組んだ。貧困の反対は世襲。総選挙に麻生、小泉、津島など世襲候補が出ているが、世襲は民主主義に反する。世襲政治家たちが作った派遣法で、企業に電話一本で呼ばれ、使い捨てられる労働者がつくられた。保見ヶ丘のラテンアメリカ労働者はトヨタの3次、4次受の派遣。その下に中国、ベトナムなどの研修生、実習生がいる」と問題を訴えた。

(ニュース読者の皆様からも基金にカンパをいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。よしだ・かずお、本誌編集委員)

# 市民意見広告運 動事務局から

葛西 則義

8月30日の総選挙で、自民党が惨敗しました。麻生政権の失政だけでなく、小泉(竹中)政権から続いていた弱者切り捨て政策に、国民がNOの意思表示をしたのです。広がる貧困・格差によりここまでスタスタにされた国民の生活が新政権により一気に改善されることは難しいでしょう。しかしながら当面は「生活第一」を選挙公約に掲げた民主党の活動を注視していきたいと思えます。

さて、今年も全国の皆様のご賛同により5月3日の新聞に、憲法9条・25条実現の意見広告を掲載出来ました。25条についてふれたのは意見広告として初めてのことでした。しかし、職を失い、食に事欠き、住まいもままならない人々が急増して、日本の相対的貧困率はOECD諸国の中でアメリカに次ぎ第2位となってしまいましたし、貧困が原因の自殺が増加し、自殺者が毎年3万人を越えている事態は一向に改善されていません。

こうしたことから、次期(9期)の意見広告活動も、引き続き9条・25条の実現を訴えていきたいと考えています。

ご承知の通り、2008年4月17日の名古屋高裁判決では、イラクにおける空自の輸送活動が憲法9条1項に違反することを認めるとともに、憲法前文の平和的生存権(平和のうちに生存する権利)は「全ての基本的人権の基礎にあつてその享有を可能ならしめる基底的権利である」、「憲法前文は法規範性を有する」、「平和的生存権は、憲法上の法的な権利として認められるべきである」としました。

つまり、憲法前文の平和的生存権とは「すべての基本的人権は平和の基礎なくしては存立しえない」ということです。この「憲法上の法的な権利」である「平和のうちに生存する権利」＝平和的生存権を守るために、私たちは9条および25条実現をめざして活動していきます。

具体的には、

## 一・暮らしを守る憲法25条の実現

増え続ける失業者、追いつめられて自殺を選ぶ人々、貧困の連鎖により進路を閉ざされた若者たちおよび高齢者、障害者を含む全ての人が、安心して暮らせるセーフティネットの構築、そして公平な税制改革

の実現をめざしましょう。

## 二・海賊対処法・海外派遣法の停止

インド洋での洋上補給、海賊退治の名目で、ソマリア沖やジブチへの陸・海・空自衛隊の派遣、基地機能の強化など、繰り返される、あまりにもひどい解釈改憲をやめさせましょう。

## 三・改憲手続き法の廃止

来年5月には、改憲手続法である国民投票法が施行されます。憲法改悪をやめさせましょう。

## 四・核廃絶に向けて

オバマ大統領は、4月のプラハ演説で、「核のない世界」をめざすと宣言しました。私たちも新政府に対して、北東アジアの非核化への努力を要求し、日米軍事同盟を平和友好条約に変えて、ともに、世界が一步でも核廃絶に近づくよう行動しましょう。等について記述した意見広告チラシを作成し、9条・25条の実現を訴えていきたいと考えています。

9期の意見広告運動に対し、引き続き皆様方のご支援・ご賛同をお願い申し上げます。

(かさい・のりよし、意見広告運動事務局)



# 横浜市での自由社版中学校歴史教科書採択を許さない

## 時期を一にして東京都杉並区も採択

## 審議会も無視した教育委員会の暴走はなぜ

朝倉 賢司

### 審議会無視の教科書採択

8月4日、横浜市教委は来年(2010年)からの横浜市18区中8区で、これまで多くの批判が向けられていた自由社版中学校歴史教科書の採択を決定しました。自由社版歴史教科書は、扶桑社版とほとんど同一のものであって、内容的な問題は東京(養護学校)での採択の経緯などを通じ、いかに多くの問題を持った教科書であるかについて、理解が深まってきていますが、ここでは横浜市での市教委採択の経緯と疑惑・問題点について知っていただき、問題性を訴えたいと思います。

横浜市教委での教科書採択は、形式的には教科書調査員が基礎資料を作り、それに基づいて教科書取扱審議会(横浜市では校長、市教委事務局、学識経験者、保護者代表の20人構成)が横浜市教委に答申し採択するというもので、今回も8月4日の教育委員会会議で正式に採択されたということになっています。採択当日の会議には、市民の強い

関心のあらわれとして傍聴希望者が定員20人の10倍を超えるものになりましたが、市教委事務局は傍聴者を増やすなどの便宜を図ることはありませんでした。また会議が開かれた市庁舎の外では、いつもは見られない右翼の街宣車が自由社版採択を支持するアジ演説を繰り返していたことが、却ってこの教科書問題の政治的意味を象徴していると言えるものではないかと思えます。会議では教科書取扱審議会に答申された資料を基に、現在ある18採択区(行政区と一致)ごとに6人の教育委員の意見交換の後、無記名投票で決定されました。公開の場である教育委員会の会議で、人事案件でもないものに無記名投票にすること自体もはなはだ問題ですが、一応規則どおり進められたわけです。

社  
の  
教  
科  
書  
を  
検  
討  
し  
て  
い  
ま  
す  
。  
詳  
し  
く  
な  
り  
ま  
す  
が  
、  
そ  
の  
6  
項  
目  
を  
示  
し  
ま  
す  
。(番  
号  
は  
便  
宜  
上)

①各時代の特色をわが国の歴史と関連のある世界の歴史を背景に理解し、その知識を身に付けることができるもの。  
②資料活用の技能・表現のうち、特に、表現面の力が育成されることが期待できるもの。  
③広い視野から我が国の文化と伝統を考え、国民としての自覚を持つこととする。ことのできるもの。  
④生徒の歴史的な事象への興味・関心をさらに伸ばし、学習する意欲を高めることができるもの。  
⑤様々な資料を収集・活用し、調査研究の過程や結果をまとめる力を一層伸ばすことができるもの。  
⑥歴史的事象から課題を見出し、我が国の歴史の大きな流れと、各時代の特色などを多面的・多角的に考察して公正に判断する力の育成が図れるもの。

〔平成22・23年度使用中学校教科書答申 平成21年7月横浜市教科書取扱審議会〕より

以上の項目で推薦された結果を基に、6人の教育委員が投票し8区で自由社が多数を占め、8区では3対3の同数となり委員長決済で他社、2区が従来の他社の教科書を決めたのです。自由社・扶桑社版は、6

つの推薦項目のうち③の項目のみから9区であげられていますが、他社版は複数の項目の推薦を受けています。6つの項目の優先順位はありませんが、自由社・扶桑社版は③の「文化と伝統」「国民としての自覚」の項目からしか推薦されていないのは、編集意図からして当然といえれば当然でしょうが、トータルの歴史教科書という観点で問題性のあるものであることが、資料からもはっきりと読み取れるものです。

審議会での推薦が少ない歴史教科書を教育委員が特に推して決定されたわけです。実質的に審議会の答申を無視したものと一言わざるをえません。

## 辞任市長の「置き土産」ではすまされない疑惑の究明を

採択した横浜市教育委員6人のうち、今田忠彦委員長は横浜市の元総務局長で4年前の教科書採択時には教育委員として一人だけ扶桑社版を強く押しした人物でした。そしてこの4年間に今田委員を除いて他の5人は総入れ替えとなり、当の今田委員は委員長になりました。この間の委員会では他の5人の委員の発言を見ても、結果的に委員長の意向を補佐するものであつて批判的・建設的な発言はなされていないと感じられるものです。教育委員選任は建前の中立性はあるものの、実質的に行政の長の意思を反映したものであることは事実で、横

浜では中田前市長の「置き土産」と言われるものです。任期を全うせずに事実上市行政を投げ出したのが中田前市長で、登場時の市民派としての合理性・経営手腕と開明性がすっかり色落ち最後の土産として置いていったのが、今回の教育委員会委員人事であり、具体的には自由社版歴史教科書であつたことは厳然たる事実です。ここでは中田市政を批判するのが本旨ではないのですが、その責任を免れることはできないはずです。

形式的には教育委員会の権限で検定を通った教科書を採択したのですから、採択当事者が批判を受け入れようとしなないことがあるとしても、ここでひとつ大きな疑惑が生じています。確認は困難で当人はけつして認めないでしょうが、今田委員長と自由社の関係です。自由社版歴史教科書の代表執筆者は藤岡信勝氏であり、その藤岡氏が直接今田委員長に採択を働きかけ今田委員長が内諾していたという内容です。このことは横浜市の行政幹部、議会幹部の一部も報告されていたのでは？という疑惑です。もしこれが事実であるなら、出版社教科書の代表執筆者が、直接採択先である市教育委員長に働きかけたことになり、重大な不正を犯したことで絶対に許されないことです。

もう一つ大きな問題があります。それは、18採択区を1採択区にしてしまおうとの画

策です。今年の6月23日、横浜市教委は臨時会において、現行の18採択区を1区にする要望書を神奈川県教委に出すことを了承したのです。自由社版教科書教科書の採択が先か、採択区の1区化が先かというどころか、まさに同時並行的に市内の教科書一元化が図られようとしているのです。市内、採択1区の理由が振るつています。それは、小中一貫教育の推進で区をまたがって1ブロックとなつている場合があり、教科書が違つと一貫教育に支障があるという理由をトップに持つてきています。区が違つと検定教科書を使つていても違う教育内容になつていくというのでしょうか。理由にならない理由です。教科書採択法には、付則で人口の多い区の採択区は区ごとにできることが示されているだけでなく、(種々の問題を内包しているとはいへ)規制緩和推進の中でもより小規模化が謳われているにも拘らず行なおうとしているのです。

本来学校現場で使う教科書は、国の検定制度や採択制度を廃止、教員と児童生徒・親の協議によつて使う教科書を決定すべきであるというのが、私達の考え方です。原的にいえば「教科書を教えるのではなく、教科書で教える」という昔からの文言の実践をすることが、われわれ現場の教員の改めてなすべきことになつたということでもあります。

(あさくら・けんじ、横浜市教員)

## 今こそ

## 「小さな人間」が

## まともに生きる

## 社会を

守屋 和子

小田実さんが亡くなられた夏から2年が過ぎた。暑い日に、たくさんの方が小田実さんを見送り、その後で短いデモをしたのはついこの間のような気がするのだが、本当に月日がたつのは早い。

さる7月18日に、在日本韓国YMCAのスペースYホールで、没後2年にあたっての「小田実さんを偲ぶ会」が開かれた。没後1年目の集いには事情があつて行くことができなかったのですが、今年こそはと思つて出かけた。

第1部では澤地久枝さん、黒川創さん、吉川勇一さんのお話があつた。澤地さんは、「小田さんの小説や評論を読んでほしい」と、お勧めの作品をいくつか挙げた。

また、「小田さんは市民としての行動の中でどんどん大きくなっていった人」「小田さんにとって、運動と書くことはつながらているもので、そこが普通の作家とは違う」という。小田実さんの原点には、1945年8月、敗戦間近の大阪大空襲の経験がある、と聞いたことがあるが、ベ平連を始まりとする市民運動とのかかわりがなかったら、小田実さんの書くものは少し違ったものになっていたのかもしれない。いや、私にとって市民運動をしていない小田実さんというのはいや、想像できない。

小田実さんは、反戦平和の運動をはじめとする市民運動を続けるなかで、感じたこと、考えたことをもとに多くの作品を生み出したのだとあらためて思った。

続いての黒川創さんのお話は、小田実さんの没後に出版された長編「河」についての話だったが、その冒頭に、当日の会場である在日本韓国YMCAが朝鮮独立運動にあって記念すべき場所である、との説明があつた。日本が韓国併合によって朝鮮を植民地にした後、ちょうど90年前の1909年3月1日に朝鮮で3・1独立運動が起こったが、そのひと月ほど前の2月8日に、朝鮮の在日留学生が東京の朝鮮基督教青年会館で独立宣言を発表した。その朝鮮基督教青年会館が現在の在日韓国YMCAで、この建物の入り口にはその記念碑がある、という。「河」の主人公は朝鮮人の父

と日本人の母の間に生まれた少年で、その父は関東大震災(1912年)で自警団によって拉致された後、朝鮮独立運動に身を投じているという話なので、偶然かもしれないが、意義深いものがあつた。

休憩後の第2部では、かつてNHKで放映された小田実さんの「世界わが心の旅」のビデオの上映や、韓国から来日した姜恵淑さんの民俗舞踊、小田実さんの人生の同行者である玄順恵さん、小田実文学と市民運動を語り考える会の今村直さんのお話があつた。

帰りがけ、会場から表に出てあらためて探してみると、ありました、2・8独立宣言の記念碑が。東京に、朝鮮独立運動に関連ある記念碑があるなどとは想像もしていなかったが、あらためて日本と朝鮮のつながりの深さを感じた。小田実さんの作品にも、朝鮮に関連あるものが多い。恥ずかしいことだが、私はまだ読んでない作品もある。最近の仕事以外のものは本当に時間がなくて読むことができなくなっているのだが、澤地さんのお勧めの小説から読んでみようと思つた。

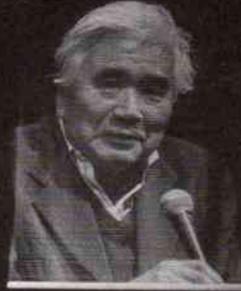
(もりや・かずこ、市民の意見30の会会員)

## 今 生きる

## 小田実

2009

北川 靖一郎



「やこそ『小さな人間』がまとも生きる社会を  
『人間の国』へ行動した作家  
小田実さんを偲ぶ会 (2009年)



熱演する姜惠淑さん 7月18日東京 (小田実文学と市民運動を語り考える会提供)

市民の意見30・関西、良心的軍事拒否国  
家日本実現の会、市民議員立法実現推進  
本部、小田実文学と市民運動をかたり考  
える会の4者は、7月25日、芦屋・山村サ  
ロンで、「今 生きる 小田実 2009」  
を主宰し、50余名の参加を得ました。

中利幸さんは、「小田実と手塚治虫・思想  
の原点としての大阪空襲」、大阪大学学  
院国際公共政策研究科准教授の木戸衛一さ  
んは、「小田実とドイツ（日独平和フォー  
ラム結成22周年）に寄せて」と題して、  
小田実さんの「思想と実践」について、説  
得的に語って下さいました。姜惠淑さんは、  
見事な舞踊で参加者に感動を与え、さらに  
それを語りで深められました。

「小田実さんが私たちの前から姿を消さ  
れて2年が経ちます。そうは思えないのは、  
あれからずっと私たちは、小田さんならど  
う考え、どう動いているかを強く感じつつ、  
集会を開き、『小田実を読む』集まりを続  
けているからです。小田さんは、共にいます  
（講演）の田中利幸さん、木戸衛一さんは、  
お二人とも戦争犯罪の告発や平和を求める  
活動に関して、小田実さんが信頼を置いた  
学者です。良心的軍事拒否国家をめざす私  
たちにとって、かけがいのない同行者です。  
韓国から来て下さる姜惠淑さんは、サロ  
ンにも震災の前年1994年にお迎えした  
ことがあります。『共生』を日韓市民が考  
える『芸術の夕べ』に出演されました。痛切  
な感情表現が鋭い技を通じてありますとこ  
ろなく表現される芸術家です。あれから15年、  
日本と韓国の市民の交流は『韓流ブーム』  
という『芸術・芸能』を通じて大きく成熟  
してきたようです。舞踊は言葉なしに、直接  
に舞踊家の魂を伝えて下さいます」。

（きたがわ・せいいちろう、市民の意見30・関  
西事務局長）

当日、広島市立大学平和研究所教授の田

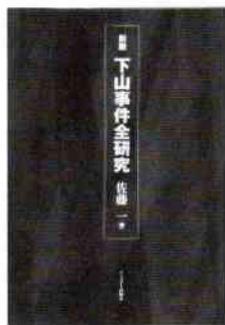




## 『下山事件全研究』

(佐藤一・インパクト出版会 6000円)

天野 恵一



本書の著者である佐藤一は、この再刊された本が世に出る直前の今年の6月17日に87歳でなくなっている。私と著者とのつきあいは、私たちが長く持続している、小さな読書会である「戦後研究会」を通して蓄積されてきた。ブラリとあらわれた彼がある問題を討論している時、「その時は刑務所の中にいたので外の時代状況は、私にはよくわからない」と発言した。聞いたら失礼かなと思いつつも私は、「なんの件で入っていたんですか」とつい質問してしまった。「死刑囚だったからね」という次の言葉は、もつと私たちを驚かした。

彼は松川事件という国家権力がねつ造した、高名な冤罪事件の被告とされたメンバーの中でも、もつとも高名な人物の一人であるということとを、その時私たちは、はじめて知ったのだ。それ以後、私たちは、かなりエキセントリックなスタイルで発言をくりかえす高齢者の、うまく聞きとりにくい言葉に、注意ぶかく耳を傾げるようになり、楽しい読書会

での交流をつみあげてきたのだ。そのプロセスで私たちは彼の足跡は、さまざまくドラマチックであり、記録に残すに十分に価するものであるという思いを強くした。そこで私は研究会の若い友人である水島たかしとともに、佐藤一ロングインタビューを試みた(それが「権力にでっち上げられ死刑判決を二度受けた男が追求した真実——松川事件・下山事件をめぐる」(『運動(経験)』25(08・4・29)号)である)。この準備のために、私は『下山事件全研究』(76年・時事通信社)を中心に彼の仕事を、キチンと読んでみた。私は、著者の「事実」にのみもつと「事実」をしらべあげていく執念に圧倒された。そして松川謀略事件の最大の被害者の一人でありながら、結果的に下山事件はGHQの謀略などではないという〈真実〉を、徹底的に明らかにせざるをえなかった著者の皮肉な「運命」(彼はそれを単独で担いきったのだ)に胸をつかれた。1949年にあつた「下山」「三鷹」「松川」

という鉄道にまつわる謎の事件、その松川事件の被告のあなたがなぜと私は彼に質問したことがある。彼は「そうだったからこそ、なんだ。謀略論はGHQをてつだつたという労働者たちの存在を前提につくられている。彼等は冤罪でしょう。私が無罪を立証しなければと考えるのは当然のこと」それが彼の回答だった。

この本について、私はインタビューアとして、このように発言している。「僕は、大野さんの松本清張の「僕」を真剣に調べたことありませんから自殺・他殺のどちらが正しいかなんて絶対的なことは言えない。ただ、事実を明らかにしようという姿勢が、佐藤さんの方には間違いなくあるけど、向こう側にはあまりないというのハッキリしてますね。これらの本には、最初に立てたストーリーを補填していく情報や論理はいっぱいある一方、都合の悪い事実は触れないで行っちゃってる。佐藤さんの方は、自分の都合の悪い事実を前に置いて反証していくという手段を山ほどしている。それをこれだけの分厚さで展開しているのだから、説得力の質が全然違いますね。どちらが事実かという点については、読後感

で間違いなく佐藤さんの方に軍配があがると思えました。大変な本だと思います」(ここでふれている大野達三の本は「松川事件の犯人を追つて」(71年新日本出版)であり、松本清張の本はあの大ベストセラー『日本の黒い霧』である)。

時事通信版の本の帯には野間宏の言葉がある。「佐藤一氏は松川事件の被告として無罪をかちとり、以後下山事件研究会の事務局長となり、研究会辞任後も独力でその真相の究明に全力を投入してきた。全国に散在する関係者を探しあて、当時の捜査、鑑定を追跡再検討し、膨大な事実と論理の集積と整理を行ってきた。いま、12年間の研究は実り、ここに刊行される。これによって事件の真相は決定的に解明されたといえる。この作品はこれまで横行している臆測、推定とはまったく類を異にし、微細な点にいたるまで科学的証拠によって裏付けられている。これに反論する者は、著者以上の証拠を提示できなくてはならない」。

著作の仕事は無視され、事件から60年の今、臆測、推定にもつとく「謀略」論は花盛りである。インパクト出版会で、再刊するべくささやかに協力した私も野間と同様の言葉をあらためて吐くしかない気持である。

# 1968年の出版三書

## 『1968』

（小熊英二・2巻・新曜社・各6800円＋税）

## 『戦後日本スタディーズ』

（岩崎稔・上野千鶴子・北田暁大・小森陽一・成田龍一編著・3巻・各2400円＋税）

## 『1968年に日本と世界で起こったこと』

（毎日新聞社・編集・2400円＋税）

吉川 勇一

1968年を中心とする10年ほどの時期、世界、日本で疾風怒濤とも言える社会の激動が続いた。この時代の分析、評論、記録などが、最近一年ほど次々と、しかもかなり大部の書籍を含めて登場した。

筆頭にあげるものは、小熊英二



の『1968』だ。上巻「若者たちの叛乱とその背景」、下巻「叛乱の終焉とその遺産」で計5千枚もの大著で、2巻で1万5千円を超えるのだから、そう簡単に手を取るわけにはゆかず、また、1カ月で読了するのも難しいだろう。まずは図書館で借りるとしても、真剣に取り組んでいい書物だ。

60年安保闘争からはじまって、若者たちの活動の慶大、早大、日大、東大などの闘争、全共闘の活動、それと関連する高校生や労働者の動きを、実に詳細に、実証的に叙述してゆく。ベ平連やウーマンリブの活動も詳しく続き、連合赤軍の悲劇に終わって結論に至る。筆者の言葉には本書の目的として「現代の私たちが直面している不幸に最初に直面した若者たちの叛乱とその失敗から学ぶべきことを学び」とある。

私は、実はまだ全書の半分ぐらしか読み終っていないのだが、まず「ベ平連」の章から「連合赤軍」の章へ、そして各学生の動きなどを読み出した。個人的な最初の関心は、あの全運動の中でいわゆる「ゲバ闘争」がなぜ始まり、そしてなぜ同志殺人にまで至ったのか、実証的経過の中で見つけてみたいということだ。ただ、「ベ平連」の章だけは、他

とかなり違う表現になっている。筆者は「しかしベ平連は、……類例のない存在となった。その軌跡には、『一九六八年』と日本の社会運動を考えるうえで、現在でも学びとるべき多くの教訓と智慧がふくまれているといえる」と結ばれており、プラサの評価で分析していると思われる。第15章「ベ平連」で、新書一冊分ほどの長さである。秋の夜長に、ぜひ取り組んでみることをお勧めしたい。

争などの検討となる。この3巻の書物も貴重な出版物と言えるだろう。毎日新聞社から刊行した『1968年に日本と世界で起こったこと』は、07年から今年春まで、同紙で月1回のシリーズとして2年間連載したものを編集した1冊で、この時代の研究者、関係者へのインタビューから構成した書物である。ベトナム戦争、公害、「楯の会」、大学紛争、ベ平連（黒川創+鶴見俊輔担当）など、文化も含め20のテーマが含まれている。

この巻も前書と同じ時代を取り扱い、安保、ベ平連、三里塚、全共闘リブ、連合赤軍、沖縄などを検証しており、いずれも重要な指摘が多数含まれている。私自身のベ平連運動と、田中美津のリブ運動での長いインタビューも各々入っている。第1巻は戦争直後の期間、そして第3巻はピースボート、オウム、イラク戦

ほかにも、この時代についての書物は数多く出されているのだが、紙数もなく、何よりもこの三書がとくに重要だと言っているだろう。（よしかわ・ゆういち、事務局、本誌編集委員）



レジスタンスと民衆を  
どう描くか  
「誰がため」



監督／オーレ・クリスチャン・マセン 脚本／ラース・K・アナセン、オーレ・クリスチャン・マセン 出演 ツーア・リンハート、マス・ミクルセンほか 2008年 デンマーク・ヘコ・ドイツ作品 原題／Flammen og Citronen 劇映画136分（デンマーク アカデミー賞5部門受賞）■12月より東京・渋谷シネマライズほか全国で順次公開

◆1940年4月から5年余り、ナチス・ドイツの占領下におかれたデンマークでは、激しい抵抗活動が展開された。警察内部に生まれた地下組織は、英国諜報部の指導のもと、ナチスへの協力者やゲシュタポ幹部の暗殺を繰り返す。その実行を担った2人の若者フラメンとシトロンの、実話に基づく物語である。

◆試写の帰りのエレベーターの中で、2人の女性が話していた。「何だかギャング

映画みたい」。たしかに、2人の殺し屋が悲惨な最期を遂げる話として見ればそのとおりだ。これが戦時下で、ヨーロッパもアジアも血で血を洗う狂気の時代だったことを念頭においても、丸腰の相手を射殺する行為が醜悪でおぞましいことに変わりはない。それは、行為者自身の心にも深い傷を残す。2人は使命感に支えられながらも、組織への不信、恋人の裏切り、妻子との離別なども加わって次第に精神的にも追いつめられて行くが、その経過はどちらかというところドドラマ風に、あるいは活劇調で描かれる。

◆記録資料によれば、占領下のデンマークで犠牲となった抵抗運動家は850人（うち120人は軍事裁判を経て処刑）にのぼるという。1943年、抵抗グループは、すべてのユダヤ系市民の身柄拘束を決めたドイツ軍の目をかいくぐって、そのうち7千人近くを中立国スウェーデンに逃がすことに成功したという話もある。フラメンとシトロンの孤立した闘いが、こうしたデンマーク民衆の闘いの一環として行なわれたことが（当時のニュース映像を挿入する程度ではなく）きちんと描かれていれば、作品にもっと奥行きが加わったのではないかと惜しまれる。

◆8月にあるミニシアターで30〜40年代の名画回顧上映があり、ロベルト・ロッセリーニの名作「無防備都市ローマ」（1945年制作）を30年ぶりに見る機会を得た。いうまでもなく、イタリアン・リアリズムの名

を世界に響かせ、その後続出したレジスタンス映画の嚆矢となった作品である。

◆この映画では、レジスタンスとドイツ軍の戦闘場面は1回のみ、それも僅か6〜7カット、10数秒しか続かないが、何度見ても興奮させられる。それは、その直前にあの有名な射殺シーンがあるからだ。ドイツ軍に逮捕された婚約者を追ってひた走り、撃ち殺される女優アンナ・マニャーニの演技は、まさしく壮烈という形容に値した。

◆大戦直後に撮影された同作品には、当時のローマ市民の生活苦と占領軍への怒りがなまなましく描かれていた。逮捕された抵抗運動の指導者は、拷問にも屈せず英雄として死に、彼らに協力したカトリック神父も銃殺されるというヒロイックな物語は、初見時16歳の少年だった私を含む当時の観客の胸に深く刻みこまれた。

◆後に知ったことだが、現実にはレジスタンス参加者のすべてが英雄だったわけではなかった。裏切りも、内ゲバもあった。拷問に耐えられる者は極めて稀なので、多くの場合、フラメンのように捕まる前に自殺を選んだという。しかし重要なのは、武力闘争の背後には、広範な民衆の非暴力不従やサボタージュが存在した事実である。戦後64年経った今、そうした等身大の全体像を踏まえた、真にリアルなレジスタンス映画を見たいと思う。

本野義雄（もとの・よしお、本誌編集委員）

# 「政権交代」後の 課題を考える

— 8月14日読者懇談会の報告 —

8月14日の読者懇談会は、前号巻頭論文「帝国危機の中で」「チェンジ」と「政権交代」の筆者武藤一羊さんを囲んで行なわれました。武藤さんのお話の要旨は以下のとおりです。

## ●おかしな日米関係を是正させる

民主党の現在までの選挙戦術は、信じられないほど弱腰だ。小泉改革をはじめ自公政権が残した膨大な負の遺産をまともに追及もせず、従って論戦にすらならない。

しかし、政権交代はあった方がいい。その上で、過去10年の既成事実を破棄することを私たちが強く要求することが大事だ。日米関係では、96年の橋本・クリントン両政権間の日米防衛ガイドラインの締結以来、あらゆる分野で米国の支配が確立した。

ブッシュ(父)は湾岸戦争でまだ国連の顔を立てたが、ジュニア・ブッシュは国際法を無視し、一国クレータのようなやり方で中東戦争を進め、ヨーロッパやロシアから反発を買い、失敗した。小泉以降の自公政権はそのブッシュの博打に張りこんだのだから、その誤りを認め、国際関係を以前の状態に回復させる責任がある。07年以降

の自公政権は、実は条約改定に等しいものを米軍再編と称し、大臣クラスの調印で発効させた。米軍再編とは、日本の軍隊が完全に米軍の指揮下に再編されることである。

かつて冷戦時代は、経済問題と軍事をバスターにするなど、従属的であっても日米間に多少の駆け引きはあった。今やそれすらない。本来米側が出すべき米軍基地の維持費用を「思いやり予算」と称し、それが義務化してしまった。さらに米国内の基地建設費まで支出しようとしている。反米・親米に関わりなく、おかしいというべきだ。

## ●右翼への寛容は危険だ

日本の右翼勢力は安倍内閣成立で首相の座を仕留め頂点に達したが、その政治綱領は到底政策化できるものではなく、国家改造計画は行き詰まり、挫折した。

しかし右翼的イデオロギーは根っこから引き抜かれてはいない。草の根で、現状に不満を抱く人びとをある程度惹きつけている。こうした動きはまだ多数の支持を得てはいないが、社会全体として右翼には寛容体制批判には警戒的という風潮に染まっており、これはきわめて危険だと思う。

新自由主義に対しては、社会的平等の回復を主張する必要がある。憲法に保障された生存権の全面化を求める運動がようやく始まりつつある。自公政権のいう景気回復とは、企業利益の回復でしかない。労働条

件の改善、労働権の回復を求めつつ、小泉改革の考え方、政策体系そのものがダメだという姿勢が重要だ。

## ●一国だけを考えても片付かない

軍備をやめて福祉国家になろう、といっても日本一国だけで理想郷になれるわけではない。日本に流入する移民労働者の問題はまだまだ大きな政治課題となつてはいいないが、彼らの後ろには多数派としての中国人やブラジル人がいる。だから移民労働者の問題は中国やブラジルの社会と直接つながっている。そういう現実を見据えた上で、どういうグローバルな運動が組めるかを考える必要がある。市場は資本の論理が支配し、企業は儲からなければ潰れる。しかし資本の論理を宿命と受け入れるのではなく、それを下からの政治で覆し、「儲からなくても、役に立つものを作っていれば潰れない」仕組みを考える。それには、国連やWTO(世界貿易機関)のような国家・官僚の集まりではなく、民主主義の原則によって世界経済を動かす政治的力をつくる必要がある。世界中の人びとが、どうやって連合して共通の意志を打ち出せるか、夢ではなく意外に近い将来の課題かも知れない。

【このほか、国際軍事産業構造の下請け化した日本、中南米諸国の新しい潮流、EU諸国の内部矛盾なども話題になりました】。

(まとめ・本野義雄 本誌編集委員)

# 読者おたより

## ◆会報は道しるべ

神奈川県横須賀市 照井敏子  
会報はとても参考になります。道しるべです。間もなく後期高齢者になります。シルバー会員でごめんなさい。

## ◆感心する内容がいつも

北海道札幌市 横路由美子  
いつもとても内容あるお便りに感心しています。がんばりましょう。

## ◆軍事費の削減を

東京都大田区 石田弥生  
軍事費を削減して医療や福祉教育に予算を使ってほしい。

## ◆国会議事堂に届け

北海道小樽市 青木すゐ子  
この会のエネルギーが国会議事堂に届き、包み込む時が訪れる時を信じています。

## ◆「市民の意見」を初めて知りました

長野県東御市 吉沢好樹  
今年初めて意見広告に参加しこの機関紙を知りました。2009年は自分の拙い短歌が生まれて初めて活字になった、私にとって特別な年になりました。ありがとうございます。いろんな方への感謝の気持ちを含めて購読を始めます。

※今年5月3日の意見広告に吉沢さんの歌が選ばれて載りました(編集部)。

## ◆総選挙後がどうなるか

関市 桜井邦彦  
総選挙後により望ましい政府ができるのか、一層ひどい状況になるのか興味深い。

## ◆政権交代後がスタート

千葉県取手市 松浦和子  
武藤一羊さんの意見、説得力があります。同感です。政権交代が実現したらそこからがスタートですね。生活の足場から粘り強く声をあげていきましょう。沖繩へ一緒に行った吉川勇一さん、お元気でいて下さい。快くなりますように。

## ◆「提言」を

東京都日野市 宗近弘武  
対北朝鮮、「対話」の具体的内容・方向性の構築を望みます。「提言」となれるよう。

## ◆息の続く限り伝えたい

京都府京都市 高橋千夏  
世界中が核や武器を競って持っているおぞましき。今日、銃を持つ兵の姿がテレビに出ています。50年も60年も「平和」について訴えてきましたが、息の続く限り伝えたいです。今、98歳になります。

## ◆衆議院員選挙後

東京都葛飾区 藤井淳子  
衆議院員選挙が8月30日に実施されますが、しっかりと憲法9条を守り国民生活が困

らない政策を考え、米国の言いなりにならない様にしてほしいです。

## ◆八月六日に

東京都文京区 金井佳子  
「出てこい、ニミッツ、マッカーサー」という唄があった。集団学童疎開をした昭和19年ごろまで、毎日のように軍歌を唄った。私は11才。

12才の夏、本当にマッカーサーが出てきちゃった。パイプをくわえて。その時に感じたことが、丸いのか、四角いのか、何もないのか、どうしても解らない。言葉が見つからない。

感じたことを、ありとあらゆる言葉を使って説明しようとする。が、その正体は掴まえてどころがなく、掴まえてどころのない正体を、ただ見ていただけ、のような気がする。

詩は、そこを言葉で掴まえられるのだろうか。

言葉を見つけられたら、形はあらわれるだろうか。

あれから64年。血を流して、血を流して、血を流して、アメリカは少し、ゆれているのかもしれない。私は今も、「そこ」から動けないでいるから、大丈夫。

## ◆9条は古くない

東京都町田市 成瀬 功  
憲法9条は決して古くない。暴力の支配する国家は互いに牙をむきあい一触即発

の関係にあり、市民はその暴力に脅かされ、生活は破壊され死の商人は栄え、市民の生活は「サクシユ」されている。

#### ◆加害と被害

宮城県仙台市 新井英吉  
戦争（武力）の本質的な恐ろしさは、ひとりの人間の中にその軽重の差はあるにしても被害（者）と加害（者）を同時に棲みつかせてしまうところにある。

#### ◆選挙権を行使します

千葉県浦安市 渡辺栄子  
いつもいつもありがとうございます。日常生活に埋没してしまいがちな私にとってこの冊子は私の生きる指針となっています。さあ、選挙です。信頼しながらでも疑いながら、ただの一票ですが選挙権を行使します。

#### ◆強い主張をしよう

神奈川県宮前区 柴田 明  
ソマリア沖3軍派兵など戦争に近づいています。今こそ平和、非武装を強く主張しよう。

#### ◆アメリカ一辺倒に決別を

北海道札幌市 小松宏平  
日本政府はアメリカ一辺倒政策に決別することが日本国民の新しい道である。来る8月30日の総選挙こそが大切な来るべき道の第一歩であることを信じて一票を投じたい。

#### ◆確かな内容が心に

東京都多摩市 奈良喜代美

ご送付ありがとうございます。確かな内容が心に響くよう自愛の日々です。

#### ◆なんとなく不安が・

神奈川県横浜市 山内ツヤ  
友人より紹介され。少しですが：戦争への道は絶対に反対ですが、何となく不安な感じがします。

#### ◆日本の宝

東京都多摩市 中島マリ子  
憲法9条は日本の誇りであり宝であります。

#### ◆傍観者には・

埼玉県春日部市 高橋喜代子  
「傍観者」にはならない、と思いながら。

#### ◆特集を組んでほしい

岡崎市 大久保敏明  
「市民の力で非核・不戦のアジアをつくりだそう」にあった「東北アジア非核兵器地帯構想」のこと、くわしく知りたいので特集を組んでいただきたい。イスラエルやパキスタンには認め北朝鮮には認めないという「2重基準」がまかりとおる限り、北朝鮮は開き直り続けてしまうとおもう。被ばく国日本から核武装待望の声がでるなど核は麻薬だ。その味を知った者がまず、手放すべきだ。

#### ◆確かな意思表示を

千葉県千葉市 田中京子  
市民の意見をいつも送っていただいてありがとうございます。積極的な行動は出来

ませんが戦争体験者としていつも関心と意識をもって確かな意思表示をしてゆこうと思っています。

#### ◆権力者に守らせるべきもの

宮城県仙台市 高橋圭子  
9条、25条は権力者に守らせるべき一番の法律だということを心に留めたいです。

#### ◆無言館ツアー、ありがとうございます

神奈川県横浜市 堀切文子  
いつもお世話になりありがとうございます。無言館ツアーの写真もお送り下さりありがとうございます。また、あんなツアーを楽しみにしています。

#### ◆運動の低迷を痛感

愛知県名古屋市長 石黒廣昭  
北朝鮮に対する制裁キャンペーンの中で反戦・反改憲の運動の低迷を痛感しています。このままでは負けてしまいます。党派を超えた共同行動が今こそ必要だと思います。「くさいと言うには既に遅かった」というのはイヤです。

#### ◆若い人たちにへ広げるには

千葉県船橋市 吉村よみ  
ノーマ・フィールドさんの講演（8月15日）を聞きました。若い人たちにもどうしたらひろげていけるでしょうね。

「読者のおたより」の多くは、会費納入の際の郵便振替票に書かれているメッセージを使わせていただいています。掲載について匿名をご希望の方は、その旨明記していただけると幸いです。

## 鳩山首相への要請など

吉川 勇一

■選挙結果については、事務局の会議でいろいろな感想や意見、そして見通しなどがにぎやかに話し合われました。「許すな！

憲法改悪・市民連絡会」からは、「鳩山由紀夫民主党代表に新憲法制定議員同盟『顧問』の辞職を要請します」という共同声明の訴えが出されました。鳩山氏はさる2008年3月4日、特異な改憲論を基盤として改憲をめざす「新憲法制定議員同盟」(中曽根康弘会長)の顧問に就任していたのですが、「首相となる鳩山氏が、こうした政治的立場にとどまることは、多くの国民の願いに合致するものとは思われず、首相には「憲法第99条の『憲法尊重擁護義務』がよりいっそう厳しく問われるのであり、特定の憲法観をもった改憲団体の役割にあることは極めて不適切」だとする共同声明です。私たち市民の意見30の会・東京も賛同し、共同声明に参加しました。

■10月中には、来年の5月3日憲法記念日掲載を目標にした市民意見広告運動の新チラシが出来上がります。お申込みくださり、お知り合いにお配りくださいますよう。新憲法制定議員同盟は、昨年3月には139人だったが、今回再選したのは53人だった

とのこと。しかし、民主党の総選挙マニフェストには憲法について「改めるべき点は改める」とありました。新政府の動きにはぜひ注意してください。来年の意見広告も依然として重大な意義があると思います。来年夏には参議院の選挙もあるわけですから……。

■5月の意見広告掲載以後、私たちの『市民の意見』をぜひ読みたいと、多数申込みが送られてきました。6月中に83人、7月に50人、そして8月中に13人の方から届き、8月末で本会員数は1999人(！)となりました。退会届や会費送金が長期になく打ち切った方もあるのですが、それをマイナスしても、現在までには確実に2千名を超えているはず。意見広告の賛同者は8千人を越えているのですから、会員の比率は少ないとは言えますが、しかし、数年前には700人を割っていたことを考えて見ると、私たちの会は非常に大きな広がりの中にあると思えます。皆さんの拡大のご努力に感謝いたします。

■ご逝去により退会される方がいらつしゃる中で、家族の方が『市民の意見』を引き継ぐというご連絡を頂くこともあります。ありがとうございます。

■先日、「生活保護費以下の生活をしていきますので、貴会に連なっていく余裕がなくなりました。これをもって退会とし……」という、辛いお便りを受け取りました。本

会費は、年で2500円、65歳以上の人と心身障害者および長期療養中の方などは2000円ですが、それ以外に「グリーン会費」という枠があります。失業中や生活保護の方など本会費が辛い方は、連絡ください。グリーン会費が適用され、年会費が1000円となります。会員の中からそのためのカンパもかなり寄せられています。ご遠慮なく連絡をお送りください。

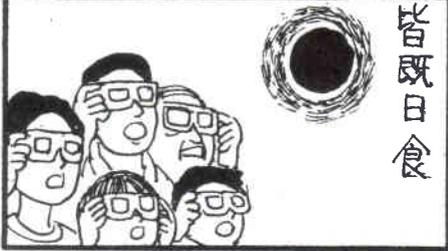
■以前一度申しあげたことがあります。昨年大評判になった私たちの書籍『武力で平和はつくれない』(合同出版、1000円)は、目の不自由な方に全文が点字のものもだされています。お知り合いの方で点字で読まれる方がありましたら、ぜひご連絡ください。

■毎奇数月の月末夕方から、事務局で本誌の発送作業があります。いろいろな話をしながら、大勢のスタッフやボランティアが仕事をします。ぜひご参加を。

■ようやく朝晩の風がだいぶ涼しくなってきました。風邪など召されないように、また広がっているとのインフルエンザなどになりませんようにお祈りしています。前号で私の脳梗塞による障害のお知らせをしたところ、多くのお見舞いをいただき、ありがとうございます。今も週1回のリハビリに努力中です。

(よしかわ・ゆういち、事務局、編集委員)

# ふしぎの国のありか by まつだたこ



2009.8.2. 8:30pm\*

## Information

- ☆【塩尻】10月3日(土)第3回再発見!日本国憲法~講演と映画の集い~14:00 ●会場:塩尻総合文化センター 1F 講堂 ●内容:講演「憲法改正国民投票法ってなんだいねえー」上原公子(前東京都国立市長) ●入場料:800円(当日900円) ●主催:第3回「再発見!日本国憲法」集会実行委員会 電話:52-1889(横田)
- ☆【芦屋】10月17日(土)「小田実を読む」記念講演会 14:00 ●会場:芦屋・山村サロン(JR芦屋駅前下車、山の手側徒歩3分、ラポルテ本館3階 0797-38-2585) ●お話し:澤地久枝(作家)「一人からはじめる」 ●主催:「小田実を読む」
- ☆【東京】10月4日(日)原発やめるための討論会 10:00~16:00 ●会場:きゅりあん(品川区区立総合区民会館 JR「大井町」駅下車0分) ●参加費:800円(資料代、会場費) ●主催:討論集会実行委員会(たんぼぼ舎内 柳田真・坂東喜久恵 電話:03-3238-9035 FAX:03-3238-0797 メール:nonukes@tanpoposha.net)
- ☆【東京】10月24日(土)「現代社会にガンジーを読み解く」お話しとビデオ上映 18:30~21:00 ●会場:文京シビックセンター 地下1階学習室(地下鉄後楽園駅・春日駅から各徒歩1分) ●講師:奈良 毅(東京外国語大学名誉教授) ●参加費:800円 ●主催:非暴力平和隊・日本(NPJ) 電話:080-6747-4157 メール:office@np-japan.org ウェブサイト: http://np-japan.org/
- ☆【東京】10月31日(土)第4回浅草ウォーク2009 戦後補償のゆがみを正し平和が守られる「しくみ」を ●集会:13:30~15:00 台東区民会館9階 ●ウォーク:15:30 花川戸公園(台東区民会館並び) ●主催:浅草ウォーク実行委員会 電話・FAX:03-3616-2338(東京空襲遺族会) メール: asakusa\_walk@yahoo.co.jp http://1021asakusa.nobody.jp/
- ☆【東京】11月6日(金)、20日(金) wam(アクティブ・ミュージアム) 女たちの戦争と平和資料館 秋の連続セミナー「映画と文学に見る「慰安婦」」 ●会場:女たちの戦争と平和資料館・オープンスペース(新宿区西早稲田2-3-18 AVACOビル2F ●参加費:入館料500円、資料代300円 ●連絡先:電話:03-3202-4633 FAX:03-3202-4634 メール:wam@wam-peace.org URL: http://www.wam-peace.org
- ☆【東京】11月7日(土) - 9日(月) (3日間) アジア連帯経済フォーラム2009 ●会場:国連大学、青山学院大学 ●呼びかけ人:北沢洋子(国際問題評論家) / 西川 潤(早大名誉教授) / 井上礼子(アジア太平洋資料センター代表理事)ほか ●事務局:アジア太平洋資料センター(PARC) 気付 電話:03-5209-3455 FAX:03-5209-3453 メール:afse@parc-jp.org http://solidarityeconomy.web.fc2.com/
- ☆【広島】10月18日(日) 国際市民シンポジウム「核兵器のない世界へ一今こそ飛躍を!」 14:00~17:00 ●会場:世界平和記念聖堂 広島市中区幟町4-42 ●参加費:1000円/学生800円 ●主催:核不拡散・核軍縮に関する国際委員会(ICNND) 日本NGO・市民連絡会+広島実行委員会 電話:045-563-5101 FAX:045-563-9907 メール:office@peacedepot.org

- ☆【広島】11月2日(月) 憲法のつどい2009 ひろしま「反貧困 派遣村から見える戦争と平和」湯浅誠 18:30~21:00 ●会場:平和記念公園内 広島国際会議場 ヒマワリ ●参加費:999円 ●主催:広島県9条の会ネットワーク 電話:082-222-0072(石口俊一法律事務所)
- 【ご紹介】本誌23ページ掲載「いちむらみさこさん」著『Dear キクチさん、ブルーテント村とチョコレット』キョートト出版
- 【お詫びと訂正】本誌前号(115号)8~10ページ掲載「歴史を伝える意味―「近現代史」はいかに教えられているか?」の筆者八柏龍紀さんの肩書きを「作家・歴史教師」と訂正します。関係者のみなさまにご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。(本誌編集委員会)

### 10月読者懇談会のご案内

- テーマ 「非暴力による紛争解決こそ最も現実的だ」
- 講師 非暴力平和隊 大畑豊さん
- 日時 10月28日(金) 18時30分
- 会場 ピープルズ・プラン研究所 ●参加費 500円  
(地下鉄有楽町線江戸川橋下車 1ーb出口徒歩5分)



文京区関口 1-44-3 信生堂ビル 2F  
03-6424-5748

# 編集後記

● ついに編集責任者の役割が回ってききました。今回は逃げ切れませんでした。しかしみなさんのご協力で何とか完成へ！チーム意見の会はチーム民主党にまけないぞ？！

● 次号から挿絵の描き手が代わります。これまでカットを提供して頂いた吉岡セイさん、ありがとうございます。繊細に見えてどこか力強さ、主張のある挿絵でした。次号からは村雲司さんに担当して頂きます。

● 『市民の意見』の読者がまもなく2千人を超えしようとしています。創刊号からの合本やCD・ROM版も作成中です。

● 来年は新安保条約成立から50年。日米軍事同盟から日米友好条約への転換の年に。

● 編集委員 天野恵一、阿部めぐみ、有馬 (吉田和雄)

## 市民の意見 30の会・東京 2009年7月～8月会計

<b>1. 収入</b>	
一般会費	435,000
協力会費	125,000
敬老会費	378,000
障害者会費	31,300
(会費小計)	969,300
カンパ	167,500
ニュース販売	1,400
バッジ等販売	5,160
集会入場料	5,500
受取利息	998
預り金(*1)	111,000
立替金精算(*2)	1,134,499
<b>収入計</b>	<b>2,395,357</b>

<b>2. 支出</b>	
印刷費(*3)	635,650
発送費(*4)	151,295
通信費	21,896
事務用品費(*5)	50,010
消耗品費(*6)	117,881
編集費(*7)	10,630
会場費	2,000
交通費	75,740
事務所費	110,000
光熱費	7,636
手数料	60,945
諸会費(*8)	50,000
雑費	5,826
立替金(*9)	126,271
預り金精算(*10)	192,000
<b>支出計</b>	<b>1,617,780</b>
<b>3. 収支</b>	
前期からの繰越	7,206,673
次期への繰越	7,984,250
<b>4. 残高の内訳</b>	
会基本会計	4,998,014
条約基金	176,715
F/I基金	2,665,820
預り金	143,701
<b>計</b>	<b>7,984,250</b>

注(\*1) 意見広告賛同金預り。(\*2) 意見広告家賃、光熱費他¥134,499、立替金¥1,000,000回収。(\*3) ニュース114号¥384,914、115号¥239,936、チラシ他。(\*4) ニュース114号発送費他。(\*5) ニュース編集用スキャナー他。(\*6) 30の会名入り封筒作成費¥107,426他。(\*7) 読者懇談会講師謝礼¥5,000、カット作成費用等。(\*8) 「小田実徳ぶ会」分。(\*9) 意見広告事務所家賃8-9月分他。(\*10) 意見広告賛同金

### 会計報告

保彦、岡安英治、佐橋弥生、杉内蘭子、高橋武智、高岡甫雅(次号担当)、西田和子、野澤信一、古澤宣慶、道場親信、本野義雄、諸橋泰樹、吉川勇一、吉田和雄(本号担当)

● 計報 会員のご逝去の報をご遺族からいただきました。

杉原悦子さん(千葉県船橋市)  
星建男さん(東京都文京区)  
橋本俊之さん(和歌山県和歌山市)  
忍足欣四郎さん(埼玉県所沢市)

謹んでご冥福をお祈り申しあげます。

先日、遅めの夏休みを取りふるさとへ帰省しました。数年ぶりに歩いた駅前商店街はひっそりと静まり返り、多くの商店が扉を閉め、1時間ほどの散策で出会ったのは、数えるほどの人と数匹の猫だけでした。かつては近隣からも大勢の人々が買物に押

し寄せ、地域一番の賑わいと活気に溢れていました。政権は交代しましたが、このよな地方都市に生活者のエネルギーを再び呼び戻すことができるのでしょうか……できる事を願っています。

さて、今期会計は黒字となりました。前期積み残した114号の印刷費と115号の印刷費2回分の支払いや会の封筒、スキャナー等少し大きな支出があったにもかかわらず黒字となりました。今期も前同様、新規会員の増加とカンパを寄せていただいたおかげです。ありがとうございます。スタッフがとって、このように一人でも多くの読者が増えることは大きな喜びであり、ニュース作りの励みとなります。(上口)

